

---

# キマグレセカイ

fyin

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キマグレセカイ

### 【Zコード】

Z0910K

### 【作者名】

f\_yin

### 【あらすじ】

神様のきまぐれで異世界に（？）

面白いこと大好き女子高校生がトリップしてそこでゲームに巻き込まれていく。

とりあえず魔王城に居候朗してるけど・・・  
紳士口調で若干お人よしな主人公はそれなりに楽しんできます！

HPからの転載です。

## キマグレプロローグ！

これは、魔王にも聞いたこと……

「キミは……何のために、戦うのかな？」

ワタシはボロボロの少年を見下ろしながら聞いた。

「護る……ため、だ……」

少年は顔を上げ、ワタシを睨みながら言つ……その真つ直ぐな目を見て、ワタシ的好奇心がうずいた。

笑みを深くし、少年に言つ。

「気に入ったよ、少年。」

クルリと反転し、仲間でもないのに今まで一緒にいた人達に言った。

「ワタシは勇者側につくよ……」「こちらの方が、退屈せずにすみそうだからね？」

おどけるように言えば当然、抗議は言われる……頭の堅そうな眼鏡に。

「なつ……貴様、裏切る気か！」

その言葉にワタシはクスリと冷笑する。

「裏切るもなにも、ワタシは貴方たちとお仲間になつた覚えはないよ？」

挑発的なワタシの物言いに、あちら側のボスである魔王ことリオは愉快そうに笑つた。

「いいよ？別に、僕はかまわないから。」

「さすがリオ。キミはわかっているね。」「

クスクスと笑いながら、からかうように賞賛する。

「でもね？ 嘁音・・・」

声が間近で聞こえ、振り返る。

驚いた・・・こつの中に、リオがすぐ前まで来ていた。

「敵側に行くのなら、僕は君を奪うから・・・覚悟しておいて、  
ね・・・・・？」

いつもはしないような妖笑で、ワタシに言った・・・

「いつておいで？ 嘁音・・・今日は見逃してあげるから。」「

背を押され、彼のもとへ走りよしやがむ。

「おーい、少年いきているかい？」

彼は今にも死にそうな怪我を負っている・・・ので、確認してあげた。

ワタシって優しいだろ？

「・・・・・テメエがこんな怪我負わせたんだろうが・・・

うん、そうだつたね。

「はいはい大丈夫だよ、今治してあげるから・・・

そう言ひ、ワタシは手を彼に向ける・・・白い光が彼を包み、怪

我は全て治った。

「治療完了！ 君達の拠点はどこかな？ 少年、イメージしてくれれば  
いけるよ？」

少年」と頬者と言ひ。

「お前は・・・・」 ひり側につくのか？

「随分とマセたじゅべり方するのだね、少年頬者君？

「はぐらかすな。質問に答える、ヤミドロ。」「

睨んでくる少年にワタシはわざとらしく肩を竦め、答える。

「はぐらかしている気は無いのだが・・・大丈夫、ワタシはもともとあちら側についていたわけではないからね・・・面白そうな方にしつづもりだつたからいいのだよ。」

フードでみえないかもしぬないが、一応困ったような表情を作つておいた。

「信用、出来るのか？」

あらかさまに疑つてくる少年に、ゆつくつと言つた。

「あなた方が裏切らないかぎりは・・・ね。」

少年はフッと笑い、差し伸べたワタシの手をとつた。  
少年を立ち上がらせ、魔王組の方を振り返る・・・  
フードは外さずに、ニッコリと笑つた。

「ワタシの名は、悲月喰音ヒヅキシャノン・・・勇者側につくよ。」

## #マグレプロローグ！（後書き）

他サイトで連載してるこの小説・・・  
なんとなくはじめてみた！！

キマグレ？！

「ひ～ま～だ！！」

その辺の石を蹴りながらつぶやく。

ワタシは今スゴク暇だ・・・面白にコトの一つや二つ起きてはく  
れないだろうか。

イヤ凡人であるワタシがおじがましいこととはわかっているのだよ  
？顔も体型も並で・・・  
頭の回転は速いほうだと思つけど・・・あと声かな、アルトとテ  
ナーの間くらいの・・・

(聞いていて心地いい声って言われたけどそれだけなワタシだしね。)

誰もいないし、暇だったので・・・大好きな歌を歌つてみる。

『私は墮とされた この世界に・・・

醜いセカイ憎いの このセカイ  
美しいセカイ愛しいの このセカイ

くすみ輝くこのセカイ  
笑みも涙もあるこのセカイ  
愛しいセカイ  
憎いセカイ

アナタはどうちら？

私は・・・』

ピタリ、と歌つのを止めた。

何故かと言えば、口々何処だと云つ事態だから。

「なんだ・・・・? 口口・・・・」

何故だか真っ白な空間にいるワタシ。

(ほんと「へ? わきまで近所の道路だったのに・・・」)  
キヨロキヨロと辺りを見回していたら、白い髪で白い瞳のお兄さん  
がでてきた。

「よつじな・・・」

「わざと返していただきたい。」

「・・・」

あらり、黙つちやつたよこの人。

キマグレ？！（後書き）

神様登場。

・  
「人の話は最後まで聞くものだと習わなかつたか？」

「教えてもらひうつまび不しつけでもなかつたのでね。」

だつて急に知らない所に連れてこられたら混乱して誰だつて礼儀の一つや二つくらい忘れるわ。

「なんか厄介事に巻き込まれそつた雰囲気がしたから……ね？」

「ね？じやない。暇だ暇だとぶつぶつ言つていたからこの俺様がわざわざ呼んでやつたのだ！」

おや、俺様だなんて今時珍しいね……それとワタシは『面白いことがないかな』であつて『厄介事に巻き込まれたい』訳じやないのだよ。

「じゃあ……白髪青年。」

凄く嫌そうな顔されたけども気にしないでおこうか。  
美形なのにこの神様は中身が若干残念ならしい……

「え、事実だけども酷くない？これ若白髪じやないよ？もともとこんな色なんだから。地味に傷つくよ？」

イヤだつてほら、他に特徴らしい特徴ないし……嫌なら名前くらへり名乗れよ。

「俺の名は、セスだ。」

「覚えやすい名で結構なことだね、で？セス君……ワタシに何をやられてくれるんだい？詰まらない事だつたら殴り飛ばすよ？」

「……と妖しく笑いながら言つ……それにセスは若干怯みながら答えた。

「異世界に行つて適当に動いてもいい。」

・・・・・・・・・・・・はい？

「それだけかな？」

他にもシック『//』があるけれど。  
とこうか異世界なんてあるのだね。まあまだ真実かどうかはわからなけれど。

「ああ、それだけだ  
・・・・つておいい！… まだ詰まんないつて決まつてないじゃん！  
その振り上げた拳しまつてくれお願いだからー！」

とりあえずワタシが無言で拳を振り上げたらセスは早口でさう言つてきた。

「イヤ、一発殴つておいつかん……なんて？」

「爽やかな笑顔でそんな物騒なこと言わないでくださいー。  
ああ、説明しようとかと思つていたけどもつこーーー向ひで直接誰かに聞けー！」

セスが言い終わったら、急に田の前が真っ暗になった。  
え、ナニコレ！

『向こうで生き残れるくらいの力は『えておいたからな

・・・何かとイメージしたり精霊に呼びかけたりしら使えるんで。』

闇の中で、セスが言った気がした。

イヤ・・・意味わかんないからねキミ。

ああ、あの小説読み終わってなかつたな・・・ってか受験前なのだけど、高三なのだけど・・・

なんて、意識が薄れいく中、とつとめもなくビューデモいいこと考  
えた。

・(後書き)

ギャグは書きにくい

## キマグレ？！

次に目が覚めたら知らない街の中に立っていた。

辺りに人はいない・・・けれど、違和感はそれだけではないらしかった。

並ぶ家々は中世どこぞの様な感じのデザイン、そして今は夜らしく暗い・・・無人の街が無駄に恐ろしい。

ワタシは街を出た・・・

暫く行くと深い森があった。

これまた薄気味悪いもりだとは思うが、進まなければ何もないだろう・・・探検つて結構好きな方だしね？

「あ・・・この格好は不味いよね・・・」

ふと思い出した。

今のワタシの格好だ・・・黒ワイシャツに黒チェックの膝丈上スカート、黒いショートブーツ、下校中だったからねえ。

町並みをみたかぎりじゃあ、服装もそれなりなのだろうか・・・

とりあえずマントでも被つておけばいいよね

自分でもどうかと思うけどしようがないじゃないか・・・

（えー・・・と、イメージすればだいたいのことは出来ると言つていたね？）

シスの言葉を頼りにフード付きのローブをイメージし、手のひらを自分に向けてみる。

「へえ・・・すごいな。」

次の瞬間、思わず感嘆の声をあげた。

ワタシは闇色のローブをまとっていたのだ・・・中の服は変えて

いないけど、まあ見えないしいいだろう。

面白くなりそうこと・・・そうだな・・・

性別、偽つてみようかな、ワタシ声だけでならどうちかわかんな  
いし、その方が面白そうだしね。

そんなことを考えていたら、遠くから悲鳴っぽい声が聞こえた・・・

フードを深く被り、そちらの方へ急ぐ。

声の主は化け物に襲われていた。

（メイドみたいな格好だな・・・）

普通さ、逆だよね・・・異世界に来たヒロインが襲われてソレをイケメンが助けてくれるというのがセオリーだよね・・・まあ、ヒロインなんて柄じゃあないから仕方ないよね・・・

悲しくなんかないよ！

「下がつていってくれるかな？お嬢さん。危ないから・・・ね？」  
護るべく前に立つと、化け物が向かってきた。

地面が槍のように突き出す様子を思い浮かべる・・・と、その通りになり化け物は槍に貫かれた。

化け物はグツタリとして、血が槍を伝つ。

「大丈夫でしたか？」

しゃがみ込んでいるメイドさんに手を差し伸べる。

ワタシは女性に優しくがモットーなんだよ？

「あ・・・ありがとうござります・・・」

おずおずと、ワタシの手をとった。

（可愛いなあ、もう・・・）

決して、レズなわけではない・・・立ち上がりせ、問う。

「お嬢さん、こんなところで何をしていたのかな？」

「あ・・・はい、僕は城の使いで・・・手紙を届けに行つた帰りでした。」

・・・・・城？

「ふうん？ そうなのかい、でも一人じゃ危ないよ？・・・そりだ、ワタシが送つていってあげようか。」

自分の顔がほころぶのがわかる・・・面白く、なりそうだ。

「ええ！？ そんな！ 申し訳ないです・・・」

「いいよ、ワタシの勝手に言い出したことだから・・・ね？」  
少々強引だが、乗りかかった船・・・逃がすわけにはいかない。

「で、キミは誰の所に行きたいのかな？思い浮かべて」りん？」「

「す、すみません・・・えっと、魔王様のところです・・・」

今だ申し訳なさそうに誤つてくるメイドさん・・・つていうか魔王

ね、どういう人が、少し気にはなる・・・あ、そういうえば・・・

「お名前は？お嬢さん。」

・（後書き）

ちなみに連載してるサイトはもうキマグレ?まで終わってる。

## キマグレ？！

「リ、リシエラ……です。」

「フフッ、可愛いなあ……リシエラ嬢は。」

思つたことを言へば、リシエラ嬢はわかりやすくつろたえる。

「そそ、そんな・・・か、かわいいだなんて、あなた様みたいなかッ」「いい方に言われると・・・」

「本当の事だよ?さて、お喋りもこのくらいにしておこつか。

・・・行くよ?」

「は、はい」

リシエラ嬢の手を取り、魔王のもとへ飛んだ。

一瞬で場面が切り替わった。

「ここであつていいのかな?リシエラ嬢。」

「あ、はい・・・・・ありがとうございます!」

花がほころぶように笑つて御礼を言つリシエラ嬢。

「いいんだよ?」これくらいね・・・・といひで、その方に用があつたんじゃないのかな?」

さつきからこちらの方をジッと見ているつぽいんだけど?

熱い目線が突き刺さるよ?モテる女は辛いね・・・・はースミマセン自重します。

「あ・・・すみません、リオ様。」

魔王が口を開いた。

「ねえリシエラ、そこの人・・・・誰?」

「あ、ええ、と・・・・そういうえば、名前・・・・

そういうえば名乗つてなかつたね、ワタシ。

「フフッ、名乗るほどの者でもないよ?それじゃ・・・

そう言い、立ち去ろうとした・・・

「リシェラが世話になつたね？お礼言いたいから、リシェラ出て  
いてくれない？報告は後でいいから。」

「はい・・・」

・・・格好良く立ち去ろうとしたのにね・・・リシェラ嬢の方が  
出て行つてしまつたよ。

改めて魔王を見る。

綺麗な銀の短髪・・・長めの前髪から覗く深紅の瞳に白い肌、顔  
立ちも綺麗だね・・・

人懐っこい感じの笑顔だが、相手は魔王・・・油断は禁物。

#マグレ～！（後書き）

やつと魔王登場。

自分に言い聞かせ、口を開く。

「お礼だなんて、ウソだろ？……何の用かな？」

「王に対してため口か？礼儀知らずだな。」

いつの間にか、翠髪のメガネ美形がいた……

「あいにくこの国の者でもないよ。いいだろ？魔王。」

ワタシが笑つて魔王を見やると、彼は楽しそうに笑っていた。

「面白いね、キミ……いいよ？堅苦しいの嫌だし。」

「だとさ、メガネ君？これでいいだろ？』

「クツ、しかし……つていうか俺はスイ『はいはいちょっと待つてね？』

メガネがそんなにイヤだつたのか……

「ワタシは、敵か味方かわからない人たちに素性を明かす気はないのだよ……それなのにキミ達の名前とか聞いたら対等じゃなくなる。だから、名前はまだ……ね？」

「クスクス……いいよ？じゃあキミは『ヤミイロ』でいいかな

？』

まんまだね。

（闇色のローブだから、『ヤミイロ』ね……）

「いいよ？ワタシは……まあ、キミたちの口とは適当に呼ぶから。』

「うん、わかつた。で、キミを呼び止めた本当の理由は……皆の前では言いにくいから、僕の自室で待つていてくれない？後でいくから、今仕事中なの。」

後でつていつのかな？後でつて……そして口は見たところ書斎のようだね。

「あ……あの……」

わお、驚いた。

気が付いたら後ろにいたリシェラ嬢・・・この世界の人達は気配を消すのが得意なのかな？

「『案内、致します。』

相変わらずオドオドしているリシェラ嬢に、微笑む。

「ありがとう、リシェラ嬢。案内、よろしくね？」

すると彼女は、分かりやすく頬を染めた。

アレ・・・ワタシ、なにかしたかな、本気で考え込むんだけど・・・

「ど、どうぞ先に・・・」

リシェラ嬢がドアを開けて先へとたもす。

「フフツ、では失礼するよ？」

部屋を出て、ワタシは暫くリシェラ嬢と話していた・・・

「へえ・・・驚いた、リシェラ嬢はヴァンパイアなのだね。」

リシェラ嬢がヴァンパイアなコトもだが、ソレよりも先にヴァンパイアが存在していたことに対するびっくりだよ。

本当驚いた・・・さすが異世界何でもありだね！

「はい、紅い目でわかるでしょう？ちなみに人間の血が一番好みなのですよ？」

「・・・・へえ、紅い目つてコトは魔王もだよね？」

最後のセリフはスルーしたいね。

うん、ワタシは何も聞いてはいないよ？人間であること隠しておこうか。

「はい！アレ？結構有名な話ですが、知りませんでした？」

「恥ずかしながら田舎者でね……知識が乏しいのだよ。」

「マズイ……と、いうか面白くない……異世界から来たことが

バレるのは、もう少し先がいい気がする。」

そして我ながらナイスフォローだ。

「……なんですか、でも……」

立ち止まり言葉を切つて、ワタシをジッと見つめてくるコショウラ

嬢。

「力……強すぎますよね……ヤミイロ様。」

「それが、どうかしたのかな？」

「アナタ様程の方が、今までドドドドづぶつていたのでしょうか

？」

先ほどまでのオドオドした感じが、消えている。

可愛らしい笑みはたやしていないが、この場では不釣合いでむしろ不気味だ。

なるほどね・・・

(情報収集して来いと言われでもしたのかな?)

「さあ? ソレよりも、先へ進まないかい?」

「そ、そうですね・・・すみません・・・

もとの感じに戻った。

「フフツ、ワタシは今の方が好きだな。」

「そうですか? ・・・うれしいです!」

「おつと・・・」

本当に嬉しそうな表情で、ワタシに抱きついてきた・・・身長はほぼ一緒だから、首に腕を巻きつけてぎゅーっと感じで、当然体は密着して・・・違和感。

「・・・・え?」

「気が付きました?」

あー・・・うん、気が付きたくなかったかな・・・コレは・・・

「僕、男ですよ?」

「・・・うん、わかつたよ・・・可愛い子に抱きつかれて悪い気はしないけれども、離してくれないかな?」

「ワタシは可愛い子やものが大好きなのだよ。」

「アナタの顔、見たいです・・・ダメですか?」

クツ、上目づかいは反則だよ・・・

「ダメだよ? まだ・・・ね?」

人差し指をたて、口へとあてながら言つ。

「そうですか・・・残念です・・・」

「じゃ、離れてくれないかな?」

そう言つと、今度は離してくれた。

そして、歩きながら喋りだす。

「人間の女、ですか。」

まあ、あれだけ密着すればわかるよねえ・・・出来れば、バレた  
くはなかつたのだけどね。

「別に、黙つていってあげてもいいですよ?」

「でもタダとはいかないんだよね?」

人間（血）が好きで、ワタシのコト気に入っているらしくて、な  
かなか聰明らしい彼が、何も要求してこないなんてありえないだろ  
う。

「よくわかつていますね。」

「フフッ、都合の良い解釈は中々出来ない質でね? 無償なんて、  
都合が良すぎるじゃないか。」

ワタシが言つと、リシェラは笑つた・・・面白いものをみつけた  
子供のように。

・（後書き）

本当はかなり先まで進んでいるのですが・・・一日一ページくら  
いで。

とりあえずこの小説、女装男子にはまつていたときに書いたもので  
すね！！

ちなみに俺、魔王と女装男子は大好きです！－！－（ ）（ ）

「いいね。本気で氣に入つたよ、ヤマヒロ……認めてあげる。」

認める? なんで……それじゃあ、まるでワタシを

「ためして、いたのかな?」

「ええ、そうです。貴女が大した事のないヒトなら……殺して  
いました。」

その物言いに、ゾッとした。

ワタシ、一步間違えたら死んでいたのか……それよりも、そういう事を当然のように言つ彼が恐ろしいね。

「魔物に襲われていたときからずっと、演技だつたね?」

「ククク……そうですよ? よくわかりましたね……でもこの格好は趣味ですよ?」

可愛くいっても今更だよ、リシュラ。

うう……でも可愛い……

「条件、聞いてもらいますね? 後で……」

どうやら田的の部屋に着いたらしい……だから、後で。

「ここまでありがとう、リシュラ……嬢……」

「僕的には嬢の方がいいです……これからよろしくお願ひしますね?」

うん、不吉な四文字が聞こえた氣がしたよ? 『これから』なんて・

・ リシュラが去つていった方向を、ワタシは呆然と見ていた・

「やつと入れば?」

部屋の中から、魔王の声が聞こえた……アレ? おかしくないか

い？

だつて書斎で仕事していたはず・・・まあ、いいか。

考へても仕方がないしね、この世界なんでもアリっぽいから・・・

「失礼するよ、魔王。」

言いながら、部屋へと入つた。

「遅かつたね、リシェラに氣に入られた？」

「ああ、まあね・・・」

喜ぶべきか、またその逆かわからぬいけどね。

「そ、よかつたね。」

よかつたのだろうか・・・絶対適当に答えてくるよね。

笑顔が黒いから・・・

「で？魔王、皆の前で言えない用事つてなんだい？」

「うん、あのね？・・・ゲーム、僕達の方につかない？」

うん、意味わからないよ？

・（後書き）

アレ？俺どこで話切ってたっけ・・・とふと思つた。

## キマグレ？！

「突然にかな・・・ゲームつて何のコト?」

「知らないの?」

何故か驚いた顔されたけど・・・本当知らないのだよ。有名な事なのかな?知ったかぶりでもしておけばよかつたねえ。

「ああ、生憎と知識の乏しい田舎者でね。」

先程と同じ言い訳を言つておく。

矛盾点が発生したらややこしいから・・・

「全世界の人々が知つてゐるはずなんだけど?」

墓穴掘つたね。

なんとか、動搖を悟られないよう切り返す・・・

「へえ・・・?例外もいるはずじゃないのかい?」

「言うね、神が直接このセカイの人達に伝えるのに?」

・・返す、言葉がない。

魔王とか凄い笑顔だよ・・・眩しくて怖いのだけど。

「ヤミイロ・・・キミは、何者?」

はい絶体絶命だねワタシ・・・

「さあ?ワタシはワタシだから・・・」

コレは、正確な答えかい?魔王。

魔王は暫く考えるような素振りをし、やがて口を開いた。

「いいよ?またそのうち、ね?仲間になるつていうのは?」

「それは・・・キミの敵を見てからにするよ。」

「ふうん?別にいいよ?じゃ、キミの部屋用意させるからそこ泊まつてね?」

ワタシ宿無しつて言つたかな・・・まあいいか。

気にもしょうがないしね?

「じゃあ、そうさせてもらひよ。」

もう聞こ、部屋から出た。

「何もされませんでした?」

出て早々その質問はないと思つよ?リシュラ嬢。  
「それでなによ。ところで、リシュラ嬢、ワタシの部屋はどこかな?」

「ああ、ここです。」

と、すぐ右隣の部屋のドアを開ける。

「……は?」

隣?あり得ないよね。

正体バレたらどうする気だい?

「ちなみに右隣は僕ですよ~?」

「……そうか、ワタシはもう眠いから寝るよ?お休み。  
気にしない気にしない……ワタシは何も気にしないよ?」

「深夜、お邪魔するね?」

「来なくていいから本氣で。」

『冗談ですよ~』とか言つてゐるけど嘘だね……目が本氣だつたし口調もかわつていたよ、リシェラ嬢。

とりあえずスルーして、部屋へと入り当然鍵はしつかり掛ける。ベッドの上に転がつたら睡魔が襲つてきた……そのまま、睡魔に任せて眠りへとおちていった。

眩しい……どうやら、朝のようだ。  
「ん……」

「やつと起きたね。」

・  
・  
・  
・  
は?  
・

「魔 · · 王？」

魔王がベッドに腰掛けてワタシの髪を梳いていた。

何でここにいるんだよ？

起居あがい 魔王に門々々々々

માનુષની

イヤイヤそんな處やかに言わなして下せしよ

「何をしているのかな？」

「ん? ナー一つナーモシテなによ?」

字が違う！  
なんだか色々気になるけどまずは、色々シッコ!! やはり満載だけ  
じまづは・・・・！

・(後書き)

魔王は寝込みを襲つたりしませんよ・・・・・・・・・・・・多分。

(トトト)

十一話目あたり結構魔王ヤバイですけどもーーまだ先なので・・・

## キマグレ？！

「暇だつたし……それよりもや、ここのがフードしてないけど。

「気が付かなかつた……どうりで視界がハッキリしていたのか。フードに手を伸ばしたが両手を捕まれ、そのまま押し倒された。

「離してくれないかな？魔王。」

そう言つと、魔王は至極楽しそうに笑つた。

「ヤダ。名前、教えてくれたらいいよ？」

銀の髪がさらりと揺れた。

何故かといえば、魔王が顔を近づけてきたから……

「へえ……瞳まで黒いんだ？黒髪黒目なんて、随分と珍しいね。

「言いながら、じつとワタシの目を見てくる。

「はやく離してくれないかな？」

ハッキリいつもの凄く恥ずかしいのだよ、特にキラリのよつた美形だと更に心臓に悪い……

「顔、赤いよ？かわいい。」

可愛くはないと思うけどな。

顔が赤いのはね？わかっているよ、わかっているから早く退いてくれ。

しかし、あることに気が付いた……彼が見ているのは“ワタシ”ではなく、ワタシの“珍しい黒い髪と目”なのだ。

それに気が付いたら、なんだか平気になつた。

「ハア……魔王、退け。」

あ、口調が命令口調になつちやつたじゃないか……まあいいね、別に。

さつきまでの焦りや羞恥はどうかへ行つてしまつたよ。

「つまらないね、ヤミイロ。」

・・・ハイ？ワタシがかい？

ワタシは面白さを求めるだけだから、ワタシに面白さを求めないでくれるかな。

「僕が見ているのはキミなんだよ？」

は？

それじゃあ、さっきのワタシの解釈は完全に間違っているわけで。

そんなこんな考えていたら、唇に感じた柔らかい感触。

「・・・・！？」

キスされたと認識したときには、魔王はワタシから離れていた。

「急に、何をするのかな？」

再び起き上がり問うと、魔王は悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「わかつてゐるでしょ？ 何されたかくらい。だからそんなに赤くなつてゐんじやないの？」

ああ、本当に何を考えているのか・・・」の青年は先が読めないな。

展開が読めないのは退屈しないが、それはワタシに害がない場合に限つてのコトだ。

これじゃあこいつの身が持ちきりになつといつか貞操的なものが危うい氣がする・・・

「・・・・もうここのよ。で、魔王？ ワタシに何か用があつたわけじゃないのだね？」

さつき暇つぶしと呟つていしたしね。

「氣が変わつたよ。後で僕の部屋に来てくれる？」

「・・・・わかつた。いいよ？ 別にね。」

「随分とあつさり了承したね、さつきあんなことした男の部屋に来いつて言われてるんだよ？ なんとも思わないの？」

いや冷静に考えたらワタシみたいなのに手出すわけないと・・・

ワタシ美人でもハ頭身でもないのだよ。

あ、悲しい自覚だね。

好かれるほど一緒にいたわけでもないしね・・・

「大丈夫だろう?」

多分。

だつてこの方はなにをしてくるかわからないじゃないか。

「ふうん、じゃあ、お毎終わらせたら来てね?」

「わかつたよ。」

フードを被りながら、言ひ。

魔王が扉から出て行く直前に、振り返った。

「楽しみにしててね?」

なにが!?

何故だか物凄くイヤな予感がするのだがね・・・行くの、止めよ

うかな・・・

「ハア・・・」

「幸せが逃げますよ?」

・・・・ワアビックリ。

・(後書き)

ヤミヤロ危機感0。

## キマグレ？！

「リシエラ嬢、気配を消して後ろに立つのをやめてもうれるかな？」

心臓に悪い。

というか・・・

「リシエラ嬢は、メイドじゃないよね？」

「僕はリオ様の側近ですか？」

女装趣味にコスプレ趣味？違うよね、敵を欺くためだよね？再び問おうと振り返ろうとしたら、後ろから抱きつかれた。

「ヤミイロ様って、隙だらけですよね。・・・・・そんなんだから、唇奪われるんだよ。」

焦った・・・口調が変わったのもあるが、それ以上に見られていたことに。

「見ていたのか、趣味が悪いよ？」

顔、見られたかな？・・・

「僕ね？ヤミイロに用があつたから来たんだよ。」

急に話をかえたね。

何かな？用つて・・・イヤな予感しかしないのはワタシの気のせいかな？

「そんなに警戒しないでよ。・・・少し血を貰つだけだから。イヤな予感的中じゃないか！」

え、なに今日厄日？

「昨日言つたでしょ？タダで黙つていてあげるほど甘くないって。

」

うん言つていたよ？でもね？なんで今なのかな？

「顔、見られたくないんだよね？後ろから貰つから、安心して？あ、見られてないのか、よかつた・・・というか、後ろから

つて怖さ倍増なのだけど？

「ワタシはどうすればいいのかな？」

「何もせず、じつとしていて下さい。首筋から貰いますからね？」

・・・怖いね、この状況。

フードを、下ろされた。

「ふうん、キレイな黒髪だね。」

ワタシの髪を見て、リシェラ嬢が言った。

さつきから口調口口口口変わっているね、キミ。

次に、器用にもシャツのボタンを外しはじめた。

ねえ、妙に手馴れている気がするのは気のせいかい・・・？

「ねえ？リショラ嬢、フード下ろしたりボタン外したりはワタシ  
がしても良かつた氣がするのだが？」

「いやですねえ・・・脱がしてあげるのがいいに決まっているじ  
やないですか。」

わからないね、その趣味。

キミとは永遠に趣味は合わない気がするよ・・・合いたくない  
けど。

「下着も黒いんだ、いいね。」

「何を見ているのかな？何を。止めて頂きたいね、血を吸うだけ  
なら早くしてくれないかな？」

本当に何を見ているんだ。

今ワタシ顔真っ赤だからね、見えていなくて本当よかったです・・・  
「じゃあ、貰いますね。」

言い、ワタシの首筋に牙を突き立てた。

「ツ・・・・！」

い・・・た・・・

予想以上に、痛いね。

血を啜られていたのはほんの数分のはずだが、ワタシには結構な  
時間に感じられた・・・

「『』ちそうさま。ヤミニイロ、美味しかったよ？君の血。」

名残惜しそうに傷口を舐め、離れた。

うう・・・クラクラする、キミどのがくらい飲んだの？

「リショラ嬢・・・なんだかクラクラするのだが、どのがくらいの  
んだのかな？」

「イ・・・と、リショラ嬢が意味ありげに笑つた。

「それじゃあ、リオの所にはいけないね。」

・・・はい？

それじゃあキミ、もしかしてそのために言い出したのかい？

「・・・・・残念ながら魔王のもとには行くよ、そいつ言ったから

ね。

」  
だつて行かなかつたら後が怖そつだから。

「そう？ならいいけど・・・・

ケド？

けどつてなんだい？いやだなあ、今日イヤな予感しか出来ないよ。

「気を付けて？リオ、気に入ったものに関しては貪欲だから、ね

？

ね？じゃないよキミ。

なんだか、行く前から疲れた。

・(後書き)

リショーラは変態。

## #マグレ?!（前書き）

すみません、確かめてみたりまつ??はもう終わってました。

## キマグレ？！

「いい二オイがするね、ヤミイロ？」

「そうかい？香水とかはつけていないけど？」

「違うよ。血の二オイがするって意味だよ？ヤミイロ。」

一瞬、思考が停止した。

何故、わかつた？

表情とかは見られていないはずだから、動搖が悟られることは無いだろう・・・

「リシェラだね？」

「・・・よくわかつたね？魔王。」

魔王も吸血鬼であることを、すっかり忘れていた・・・  
「僕、人間の血はあまり好きではないけど・・・ヤミイロの血は好きになれるかもね？」

お気に召さなくて結構だよ。

何で凡人であるワタシの血がこうも気に入られるんだ・・・イヤ、まだ魔王は気に入るかどうかわからないじゃないじやないか。

リシェラ嬢は事情があつたからともかく、魔王とは何も無いから血を吸われるのは御免だね。

「他人間と大して変わらないよ？」

「飲んでみないとわからないよ。」

「！？」

純粹に驚いた・・・

瞬き一つの間に、魔王がワタシの後ろにいたから・・・

抱き込まれたかと思つたら腕を捕まれ、リシェラ嬢に噛まれたところを舐められた。

「ツ・・・・！」

ピクッ と、ワタシの体がゆれた。

声がでそうになるのを、必死に抑える・・・

そんなワタシの様子に気が付いたのか、魔王がクスクスと笑った。

「どうしたの？」

「なんでもない、とりあえず離れてくれないかな？」

そう言つても、離れる気配が全くない。

というかむしろ腕に力が入つたね・・・・・ワタシと魔王は結構な

身長差があるから、ワタシの頭は魔王の胸のあたり。

今ワタシは魔王の腕の中にスッポリ納まっている・・・・抜け出そ

うにも抜け出せない。

「僕ね、最初ヤミイロのコト野だと思つてたんだよね・・・今日の朝見て驚いたよ。」

朝は「ひちが吃驚だよ・・・顔見られひやつたしね。

「ヤミイロのいたトコロでは、みんなこんなに短いスカートなの？」

「シー。」

言いつつ腿を撫でるな！

どれだけワタシが必死に押さえていると想つているんだーこの魔王のコトだから絶対氣付いている。

「ヤミイロの肌、キレイだね・・・」

今度はシャツの裾から手を入れてきて、背をなぞった。やはりソレにも、ワタシの体は正直に反応する・・・

「魔、王・・・止め、てくれないか。」

手の動きを止めてくれ。

そして離れる。

「クスッ・・・イヤだ。ヤミイロも、我慢しないで？ やつぱり氣が付いていたのかコイツ！！

血を飲むだけじゃなかつたのかな？ いつの間に趣面を変えた？

「・・・そうだね。血を、飲んであげようか。」

ブツリ・・・

首筋に鈍い痛み・・・けれど、それだけじゃなかつた。

「ツ・・・んあ・・・はつ・・・」

吸血されたときに、甘い痺れがともなつた。

「我慢できなかつた？ 今の。」

「な、んだ？ ・・・今は・・・」

問うと、リオはクスクスと笑いながら答える・・・

「今のは毒みたいなもの。リショーラの時にしなかったのは多分、君の魔力がリシェラよりもかなり大きかつたからだと思うよ?この毒、相手の魔力が大きかつたら打ち消されちゃうんだって。」

「そう、か・・・」

ヤバイ・・・頭がクラクラする・・・

さすがに、二度も吸血されるのはきついものがある。

今飲まれたのが少量とはいえ、その前のダメージもまだ残つてい  
るし・・・

「大丈夫?」

八割方キミのせいだよ、魔王。

ああ・・・でも心配してくれるあたりいい人なのかも知れない・・・

「それじゃ歩けないでしょ?ベッドで休んでいつたら?」  
と、ワタシをヒョイッと抱き上げて運びベッドへ横たえた。

・(後書き)

魔王手馴れてる・・・  
そしてセクハラを魔王はスキンシップと言こます。(..)  
被害者は当然ヤニイロ。

まではよかつた・・・

「えつと・・・魔王?」

「なに?」

「どういう状況かな?これは・・・

「僕がヤミイロを組み敷いている状況?」

そんな笑顔で答えないでくれ。

うん、わかった・・・魔王がいい人と思ったワタシが愚かだったから・・・前言撤回するから・・・

「どいてくれないかな?」

「名前・・・教えて?」

またか・・・

首を傾げて言う魔王・・・これが普通の状況なら『可愛いな・・・』とか微笑んでいたと思う。

けれど状況が状況なわけで・・・

「言つてくれないなら・・・犯すよ?」

「それは嫌だね。嫌だけども教えられないね?」  
うん嫌だ。

キミがいくら美形でも・・・ね?

ていうか、目が本気で怖いよ?

「ふうん・・・」

怖いよ、怖いって!

目が笑つてないよ魔王。

なんて考えていたら、魔王が首筋に顔を埋めてきた・・・

「ワタシなんて襲つても楽しくないよ?」

「どうだろうね?」

質問に質問で返されても・・・といつか本気でヤバイ。

無理矢理脳を働かせて、魔王を押し退けた。

勿論、男に力で勝てるわけが無いので魔法を使つたが……思いの他力が強過ぎたようだ。

魔王は吹っ飛んで壁が破壊されてしまった……。

「え、つと……とりあえず魔王大丈夫?」

魔王が人間じゃなくて本当によかった……人間なら死んでそうだ。

「クスッ……少しでも悪いと思ってるんなら、名前教えて?」

あの……本気で怖いです……目が据わってる。

「殺すよ。」

「悲月<sup>ヒヅキ</sup>……嘆音<sup>シャノン</sup>……嘆音が、名前だよ。」

こんなに命の危険感じたのは初めてだよ……やっぱり魔王なんだね。

「シャノン、ね……僕はリオ・ランディッシュだよ。」

言つて、ワタシにもかつて手を差し出してきた……

立たせると……？

歩み寄り、手をにぎつた……と思つたら引き寄せられ、そのまま軽く触れるだけのキスをされた。

「つな……！」

「そう簡単に、人を信用しちゃダメだよ？ シャノン……耳元で言われ、羞恥でカツツと赤くなる。」

「クスクス……かわいい。」

耐え切れず、魔王から離れて部屋から出て行つた。

バタンッと強くドアを閉めた。

（今なら羞恥で死ねる……）

本気でそう思つた。

ズルズルとしゃがみ込み顔を手で覆う。

まだ頬が熱い、触れられた唇が熱い……ああ、ヤバイ泣きそ  
う。

というかファーストキス、返せ馬鹿魔王が！

朝のに続きまたしても……そんなに隙が多いのか？ ワタシは、彼氏できたことないし、というか初恋すらまだだ……

「まあ・・・」

今日一度田のため息、いや二度田かな?まあいいや。  
とりあえず、今日厄田だ・・・もひ誰にも会わなによいひしお。

・  
・  
・

• (後書き)

魔王は策士（いろんな意味で）。  
すみません免許取得の勉強で一日更新できませんでした……。  
。・）

## キマグレ？！

あれから数日。

魔王は何事も無かつたかのよつにワタシと接した・・・若干セクハラじみたコトをしてはくるけど。

それはともかく、何だか今日は妙に騒がしい。

何かと通りすがりのメイドさんに聞いてみたら、何者かが城内に侵入したそうだ。

ここ一国の城だよね？ 中心だよね？ 大丈夫なの？ そんなの許しちゃって。

まいつか、気になるから搜してみよう。

魔王の城に侵入しようなんて勇氣のある人だね、たんなる馬鹿かもしれないけど・・・とりあえず、好奇心には勝てない。

との事で現在城内探索中。

「まあ、そんな簡単にはみつかないよねえ・・・」

上手く逃げているのだろう。

しかし、暫くすると前方が騒がしくなってきた、おそらくは近付いてきている。

すると、目の前の角から何者かが曲がつて來た。

その者が侵入者だとわかる。

腕を引き、近くの部屋へと引き入れた。

「ツ！？」な「シー・・・静かにして？」

後ろから口を素早く塞ぐ。

どうやら男のようだ。

結構な長身だったので、魔力で浮き彼の後ろから手を伸ばしてい る。

バタバタと外が騒がしい、それが去るのを待っていた。

「ふう・・・行つたね。」

軽く息を吐き、そう彼に言った。

「何故、助けた？」

彼が振り返り、私と目を合わす・・・これまた美形君だね。  
彼は金の髪に碧い目、白すぎない肌色。  
魔王には劣るが整った顔立ち。  
腰には剣。

この容姿だと・・・

「勇者かい？少年。」

彼はわずかに目を見開き、頷いた。

顔に似合わず正直そうだね、ていうか精神年齢低そう。  
若干失礼な事を考えつつ、勇者を見やる。

「少年って呼ばれるほど子供じやねえ！それと『アンタは誰だ、胡  
散臭そうな奴だな！』

「ワタシかい？ワタシはヤミイロと呼ばれてるよ？」

胡散臭そうって・・・まあこの格好じゃ仕方ないけど、城の関係  
者でもないのにうわつこていたキミの方がよっぽど胡散臭いと思う  
よ。

て、いうかムキになつて言い返してきたよこの勇者。  
やつぱり子供っぽいね、少年と呼ぶこと決定。

浮かしていた体を地につかし、自分よりも高い身長の勇者を見上  
げた。

碧く澄んだ瞳と口ひび。

「キミは、こんな場所で一体何をしていたのかな？」  
動搖するかと思ったが、勇者は真っ直ぐな視線のまま答えを返し  
た。

「魔王がどんな奴なのか見に来た。」

・・・・・・・・・あ、そうなの。

見に来ただけですかそうですか、ここまで来た事に感心をしてい  
たのに一気に呆れにいつちやつたよ。

あれだよ、きっと弱点探しに来たとかどれくらい強いのかとか・  
・を、見に、来た、ん、だよ・・・・

「お前、今回のゲームがどういったものか知つているか？」  
全く。

「まあ、いい。異世界からの訪問者を、もつ魔王が認知している  
かどうか聞きに来たところもある。」

ドキリ・・・と、ワタシの心臓が鳴った。

動搖を悟られてはいないだろうか・・・。

チラリと勇者を見るが、そのような気配はない。

「そうか・・・ワタシが案内してあげようか？」

そう提案すると、怪訝そうに眉を寄せた。

「もういい。胡散臭い奴について行きたくはないし、もつ逃げ続けるのも限界らしいから帰る。」

懸命な判断だね、どうやら頭は悪くはないらしい。

問題なのは性格だね。

「そうかい、気をつけて行きなよ？またね、少年勇者君。」

勇者が出て行こうとした時ひらひらと手を振り見送る、最後まで

『少年じゃねえ！』なんて叫んでいた。

また騒がしくなるが、すぐに勇者と同じ方向に音が消えていく。

おそらく、捕まる事はないだろうと思う。

一応勇者だし、ちょっとしたお呪いをかけておいたからね。ほっと息をついた。

すぐ傍の人物にも気付かずに。

「気に入った？」

綺麗な低音が、耳元で囁かれた。

・(後書き)

勇者がやつと登場ーー精神年齢低い設定だけどーー！

• (前書き)

すみませんーまた色々あつて一 日遅れましたーー( ^ ^・ )

「ツ・・・・・!？」

吃驚した、冷や汗が背中を伝つのがわかる。

「まあね、面白い人物だとは思うけどね・・・一体いつからいたのかな？魔王。」

魔王だった。

ワタシをすぐ後ろから抱き込むたちになつてゐるが、一体いつからいたのか。

いつのまにか、フードは外されていた。

「勇者がこの部屋から出て行つたくらいだよ、ヤミノイロ。」

微笑み言つ魔王だが、目が笑つてない・・・・・・あれ？怒つてる？

て、いうか首が痛いよこの体勢。

魔王はワタシより身長が高いし、後ろにいるので後ろを仰ぎ見る  
かんじで魔王と目を合わせてるので正直キツイ。

「あの、魔王？離してくれると嬉しいのだけど。」

そう言つと、魔王はにっこりと笑い（やつぱり目は笑つてない。）  
口を開いた。

「イヤだ。」

何故！！？

え、ワタシ何かしたっ・・・・ね。敵である勇者と話していたからか？

「怒つてる？何で？」

ダメ元で一応聞いてみた。

「何でだろうね？」

いや、問い合わせで返されても・・・・え、何やつぱりワタシが悪いのか？

色々考えていたら、魔王に呼ばれた。

「ねえ？ヤミイロ。」

思考の渦から上がり現実に戻ると、無表情の魔王。  
「彼は僕の敵なんだ、なにが言いたいかは解るよね？」一応警告は、  
しておくよ？ヤミイロ。」

つまり余計な手出しさするなって事だね、よくわかっているよ。  
解つているってだけで手出しあしないわけじゃないのだけど、ね。

「解つていいよ・・・彼は君たちの敵なんだからね。」

## キマグレ？！

とりあえず、謎が残るばかりだね。

勇者が帰ったあと何か魔王は機嫌悪いし、本人怒つてないとか言つていたけれどもあれは絶対怒つていた。

だつて目が笑つてなかつたしね、何か殺氣っぽいの振りまいていたしね。

（・・・・・あれば怖かつた。）

忠告した魔王の無表情、その瞳には何も映つていないよつに感じたから。

最近魔王が解らない・・・・・イヤ別に解らなくてもいいと思つただけどね？

何かワタシが魔王の事知りたいみたいじやん！嫌だね別にそういうわけじやないのだよ違う違うワタシは潔白だ。

うん、何コレ。

最近可笑しいぞワタシ、何百面相一人でやつてんだひ・・・・

「どうしたの？ヤミイロ。」

「ひあつ！つていきなり何するんだ！－！」

いきなりにも程があるし耳元で喋るんじやない！一重で吃驚してしまつた。

振り返ると、魔王がクスクスと面白そつに笑つている。

「そんなに驚かなくてもいいでしょ。悲鳴可愛かったよ？」

褒めている？褒めているのか？嬉しくねえ・・・・！

素が・・・じやなくて言葉がつい乱暴になつてしまつたじやないか。

「まあいいけど……何か用かい？」

いつまでも取り乱しているのも何か気に食わないし、何か顔会わせづらかったりそんなことはなかつたりするだらうけど！

「ん？僕より君の方が用あるんじゃない？」

「・・・・・」

何だコイツは。

さつきから気に食わない事ばかりな気がする、気じやなくて確かにそんなこと言つている。

天然か、確信犯か・・・この魔王の事だからきっと後者だらう。いつもと変わらないあどけない笑顔を浮かべているが、それが若干黒くみえるのは気のせいではないだろうな。

「『異世界からの訪問者』聞きたいんでしょ？」

魔王が目を細める・・・つい動搖しそうになるが、なんとか踏みとどまる。

「どうして、そう思つたのかな？」

これは率直な疑問。

まさか心が読めたとかだつたら恐ろしくなる。

「だつて、勇者の言葉にあからさまに動搖してたよ。ヤミイロ。それに君が興味を持ったから勇者を僕の所に案内しようとしたんじやないの？それとも興味をもつたのは彼自身？」

・

そういえば、勇者との会話を聞かれていたのだった。  
いつかりどころではなく忘れていた。

勇者には気付かれていなかつたのだけど、彼は結構鈍感なところ  
があるっぽいから。

そして最後の質問の意図が解らないのだけど？妙に声低かつたし  
ね。

「動搖した事にはよく気がついたね、魔王。けれど勇者に興味が  
あるかないかは関係ないよね。」

「そう？ そうかもね。僕はもの凄く気になるけどね。」「  
何でだよ。

あえて問わないのはその方が無難だと思つたからだ。

「異世界からの訪問者つていうのは……まあ、意味的に言えれば  
そのまだね。」

「それとゲームと、どう関係があるのかな？」

率直な疑問を投げかければ、クスリと意味ありげな笑みになる。  
勿体ぶるようなその態度に、若干イラッとした。

「ここでね？ ヤミイロ。僕の質問に答えてくれない？」

ヒヤリ……と、魔王の視線が冷気を感じるほどどの鋭さを帶びる。  
嘘は言わせない、そんな声が聞こえてくるような……田は口ほ  
どものを言つ、呑へづたものだな。

心底、そう想つ。

「君は、何処から来たの？」

わざわざ一つに切りつて聞いてくれちゃいましたね。  
しました、ふざけている場合じやないね。コレ。

「東の端にある、セリアナっていう小さな国だよ。もうないけれ

ど・・・ね?

卷之三

どうしてか怖い魔王。

いやでも本当にある国だったし、この世界の歴史書に書いてあつたし。

二十九

二〇

「ツ・・・・・！」

「シャノンや、もう少しマシな嘘ついたら？」

一瞬何が起こったのかわからなかつた。

背中に強い衝撃、押え付けられた肩、すぐ近くにある魔王の顔。気がついたら、壁に押し付けられていた。

薄い冷笑、目が笑つてないよ魔王。

「何の、事かな・・・？」

衝撃の余韻があつて、じやつかん言葉を発しにくい。

「いい加減にしてね？今、凄く機嫌悪いから。」

魔王が首を小さく傾げると、サラリと銀の髪が揺れた。クソ、サラサラキューティクルが羨ましい・・・！

なんて場違いな事を考えていても、頭の中では本格的に警鐘が鳴つていてる。

嫌な汗が背を伝つて気持ちが悪い。

「・・・・・キミはもう、分つているのだろう？」

じゃなきや、何の根拠もなしにこんな暴挙には出ないと思つ。

「気付いてたの？」

「なんお根拠もなしに、今みたいな状況にはなりえないと思つよ

？」

微笑んだつもりだけど、今絶対笑顔引き攣つてる。

それよりも離してほしい、痛いです。

「そうだね。でも、それわかつてて嘘ついたんだよね？」

今ギシッて肩が鳴つた！痛い、物凄く痛い、冗談抜きで砕ける…！

「ツ・・・・」

その痛みに思わず顔を歪めると、魔王の瞳に恍惚とした光が宿る。性格が歪んでいるのは知っていたが、ここまでだとは思ってなかつた。

人の苦痛に歪む顔見て、恍惚とするだなんて趣味が悪いにも程があるだろ？

いつもなら『ああ、コイツやつぱり魔王なんだなあ・・・』とかしみじみ思うのだらうけど！今はそんな余裕一切ない。

「このゲームに勝つ条件に関わっているんだよ。」

「へ、どひゅう・・・」

『異世界からの訪問者』が？

微笑も、恍惚とした光も消え失せ、すっと瞳が細められた。（紅い色つて暖色のはずだよね・・・？）

そう疑問に思つくり、魔王の深紅の瞳は冷めている。

「本当に何も知らないんだね、『異世界からの訪問者』さん？」

改めて言われると、何か・・・認めがたいな。

そういう思いと、今の魔王の瞳を見たくないという思いから、顔を伏せた。

「とりあえず、嘘つきにはお仕置きしてあげないとね？」

は？

• (後書き)

とつあえずでお仕置きなんですね  
・・・

## キマグレ？！

シャーランチ

軽い金属の音がしたと思つたら、ワタシの首にかけられた銀の首飾り。

つて、えええええ！？何コレー何コレ！？

突然の事に焦るワタシを他所に、魔王は笑顔だ。

頸を掴まれ目を合わせられる。

今のもけつこう痛かつた、さつきから乱暴だなオイ。

「その首飾り、僕のお手製ね。魔力を一時的に封じるんだよ？凄いでしょ。」

血の気が失せる音が、聞こえた気がする・・・勿論自分の。

「そ、そつか・・・で？いい加減離してくれると嬉しいのだけど？」

本当に本当に、離してほしい。

このままだとヤバイ、何がどうヤバイかと問われるとよくわからないけれどとりあえず魔王の瞳がヤバイ。笑ってるけど瞳が笑つてないって！

え、何この人（人じゃないけど…）何考えているの本当謎。

「シャノン？」

何故急に名前呼び！？

アレ？確かに前にも一回呼ばれたよね、なんだっけその時も少しころではなく嫌なめにあつたと思うのだけど？ワタシの気のせいかな？

ああ、そういうえばあの口色々あつたな・・・ちよつと遠い目をしてみる。

軽く現実逃避をはじめたワタシに気が付いたのか、魔王が更に顔

を近付けて甘く囁くよしみに言つた。

「ねえ？シャノン？僕がこんな近くにいるのに違ひないと考へてない？」

「う・・・」

思わず苦悶の声が出てしまつて、ハツとした。

ワタシの馬鹿！！

何『う・・・』つて！何なんだ？何なんだ！ワタシの馬鹿、肯定するようなものじやないかああ！！！

「駄目だね、シャノン？」

そう言つて、ワタシの首筋に顔を埋めて舌を這わした。  
ゾワリ。ヒ、悪寒が走る。

吹つ飛ばしてやりたいところだけど今は魔法が使えない、試して  
みたが何も出来なかつた。

ああ、今魔法の便利さを本当に実感しました。

「すまなかつた。謝るから今すぐ離してくれないか？」

一応謝りはしたが、一体どこからがワタシの非なんだ？よくわから  
らないワタシは愚かなのか？そのような事はないと思つただけど……

・アレ？

「ねえ？魔王。ワタシ何か悪い事したつけ？」

「嘘ついたでしょ？」

「ワタシにも事情が「どんな？ないでしょ、そんなの。」

おいいいいい！！今断言しやがつたこの魔王！おかしいだろ説明  
もさせてくんないの？！決め付けはいけないだろ、決め付けは！……

「じゃあ何？一応聞いてあげる。」

「隠していた方が面白そうだろ？」

そう答えるワタシもワタシだけどね……耳元で喋るのやめてく  
れないので吐息がかかつてゐる！

「そんなの事情に入らないよ。」

いやキミワタシの立場なら間違ひなく同じ考えだつたよね。

あ、魔王ならこんな状況には陥らないか……

「フフッ、ワタシにとつてはとても大事な事だよ？」

この際笑顔が引き攣つてゐるのは「愛嬌」。

負けるなワタシ！

「どうでもいいけどね。」

弁解の余地もなしだですか・・・

至極どうでもいよ」と、魔王は言つ。

と、いうか一切抵抗できないのが悔しい。

男女の力の差か、もしくは彼が吸血鬼なせいなのか、どちらか定かではないが押え付けられた肩はピクリとも動かせないでいた。

片腕は自由（顎を掴まれているから左肩は無事）なので魔王にせめてもの抵抗で彼を押し返そうとしたら、苛立たしげに舌打ちし邪魔だとも言つようになつたシの腕を上で一つにまとめられた。

今度はどちらの腕も使えない・・・アレ?状況悪化してない?

「あ、の・・・?何するのかな、血を吸うの?」

「こんな体勢で?そんなわけないでしょ。」

・（後書き）

魔王は一人称僕だけど俺様です（ - - - ）

どんな体勢そしてどんなわけだよ。

あの、その獲物を前にした捕食者みたいな目やめてくださいお願  
いします。マジ怖いです。

顎を掴んでいた手をが、下へ下へとワタシの首の線をなぞつてい  
く。

「シ・シ・シ・何を・・・」

「何しようとしてるか、わからない？」

妙な含みの感じられる物言いだ。

シユツと音がした、何の音かといえばローブの紐。

ローブはバサリと床へ落ちて、下に着ていた制服が露わになる。  
制服を見て、魔王は笑んだ。

「脱がしやすそうな服でよかつた。」

・・・・・・・・・・・・よくない！！！

あまりの衝撃に何を言ったのかすぐには理解できなかつた。

何、脱がすの？ 何で？ 別に見て楽しいものじゃないよ！？

「シャノン・・・」

言いつつボタンを外すな！

あああああああどづする？ どづするワタシ！！ 絶体絶命だし！

魔法使えないし！

『シャノン』

ふと、二つかじら聞いた声に呼ばれる。

ブツリ・・・と、ワタシの意識が無理矢理切られた。

「久しぶりだな、シャノン。」

「よし、とりあえず一発殴られようか。糞神。」  
とりあえず殴つておいた。

問答無用とか酷くないですか、とか言わない。

だって目の前にいたのはセス、あの諸悪の権化のセス！当然だと  
は思わないかい？

「わるかつたつて！謝つたろ！？」

「一体いつ？どこで？何時何分何十秒？地球が何回周った時？」

小学生か。

冷静な自分がつつこむけどこの際無視だ。

「まあいいけれどね。セス様？ワタシに関するあの世界での役目、  
教えて頂けますね？」

敬語なのは相手が神だからではない、当然厭味だ。

## キマグレ？！

崩れ落ちる彼女の腰に腕をまわして支えた。

「シャノン？」

突然気を失った彼女に呼びかけるが、当然返事はない。  
彼女がこの程度のこととて氣を失うような柔な精神力ではないこと  
くらいわかっている。

「・・・・世界神か。」

精神を無理矢理引き剥がして連れて行けるモノなど限られている。  
本当に、忌々しい・・・  
世界神は知っているだろうか、自分が殺してしまいたいくらい憎  
まれている事を。

知らないだらうな、世界神はいつもどこかしら抜けているから。  
今だつて、そうだ。

彼女の体をここに残していくことが、危険なことだということも  
わかっていない。

馬鹿だね、セス・・・あんたは、全知全能などではない。

だつて僕から彼女を護る事すら出来ない。

ふと、彼女を見やる。

痺れそうな程の甘美な香りに、意識のない彼女・・・本当に、  
無防備。

異世界の人間は皆こうなのか、それともシャノンが特別なのか。  
どちらにしても、失敗したね、セス。

シャツのボタンをいくつか外して、胸元を肌蹴させる。

そこに口付けて赤い花を散らせた。

それからいつもはしないような深いキスも、息が切れるくらいした。

けど、まだ足りない。

「ハハツ・・・・」

本当、嗤える。

いくら異界の人間だからといって、たかが人間にここまで入れ込むなんて・・・

今すぐにでも彼女の血を貪りたい、彼女を犯してしまいたい、けど、まだダメだ。

それに、僕はシャノンを手放す気はないからね。

このままだと本当に理性がきかなくなりそつだから、ベッドに寝かせて退散しようと思つた。

『気を付けてね? シャノン

君が僕を狂わすんだから・・・』

## #マグレ?!（後書き）

リオ視点・・・リオ思考がちょっとアブナイヨーー。  
思いつつも書きやすかつた、どうしよう自分。  
ちなみにリオはヤンデレじゃありません。たぶん・・・

## キマグレ？！

「な、何か寒気が・・・！」

あ、今ワタシ何か壊した？そんな気が・・・まあいいや。とりあえず、説明はしてもらつたから。

「人王と魔王の勝敗を決める道具つて、わけだね。ワタシは。」

そう言つと、セスは眉を顰めた。

「道具とは「そんなどらう？怒りはしないよ、そう言われても。」

言い募ろうとするセスを遮つて言つ。

怒つてはいない、だが不服ではある。

「異世界というのを楽しんではいるからね、それで？ワタシは帰れるのだよね？」

デメリットもあればメリットもある、だから納得はしているつもりだ。

ただそれは期間限定。

「帰れる。だが、勝者がお前を望めば帰れない。」

「それはない絶対ないあり得ない。」

即答でノンブレスなのは嫌な予感が過ぎつたからだ！

大丈夫、誰もワタシを望まないから！！

言つていて悲しくないこともないが、そこで望まれてしまえばワタシは元の世界には帰れないじゃないか。

向こうには家族も友達もいる、みんな大切な人たちだ。

それらを全て捨ててでもこちらにいたいとは思わない、こちらに

はそこまで大切なものはないからだ。

「そうか、まあいい。もう戻れ。」

「は？」

「ちょっと、え、何マジで？！あの状況に？！！

「とりあえず、達者でな・・・」

「ザケンナー！！！」

ପ୍ରକାଶକ

トジャブ?

前にもこんなことありたよね。

魔王はベッドに腰掛けてワタシの髪を梳いているという・・・

たた今回ばかりが笑いでしません

起業上り、達和感。

アレ？胸元が若干涼しい気がする、アハハツ何でかな？気のせい？

何をしたのかな。

ボタノが四つ下されて凡就

が外で勝手に歩いている間に、何があるか見て

「ん？ 我慢できなくて仕事やつた。」

「ヘッ」とも付に加えそ二た

ツ・・・と指を這わせたのは腿、しかも内側。

そこをみると赤いアト・・・・・・ねえ冗談？冗談だよね！？え、

!!キヌマニウツヒロ付けてつかるものござぬ!!?

何かどうでもいい方向に思考が流されたぞ今。

「混乱してゐねえ。」

魔王面白そうにクスクス笑つて いるけどワタシ全然楽しくない！！

呼ばれたので、視線を合わせた。

「「」のまま続けてもいい?」

「駄目に決まっているだりづーーー！」

馬鹿かお前は！

何今日なんでこんな頭湧いてるの！？魔王おかしいよ（おもてに頭  
が）ワタシなんかを相手に欲情するなーー！

本気で怒鳴つたにも関わらず、魔王は楽しそうに笑つた。

「・・・・・ワタシみたいな子どもに、心臓に悪い冗談はやめて  
くれないか。」

そんな魔王を見て冗談だと思ったのをいつた、深く深くため  
息を吐きながら。

冗談にしては、少々どこりではなく過激な気がしないでもないが・  
・そこは譲歩しよづじやないか。

「子ども？ シャノン幾つ？」

「十八・・・」

「ふうん、じゃあもう大人だよ？ ここでは十七で成人だからね。僕ももう五年は前に成人。」

「は？」

五年つてことは今、二十一？

「はあ！？ 四つも年上！？ まだ十代かと思っていたよ？！！」  
や、二十代に見えなくもないけど！ いつもニコニコしていてその笑顔が人懐っこくて若干幼く見えさせていたのかな！？

「うん、そう。年上的人は敬おうね？」

人差し指をワタシに押し当てて言つた、このアクションはいらなりんじやないか？

「・・・・・シャノンの唇つて、柔らかくて甘いよね。」

「意味わからないよ？！」

敬う氣にもなれんわ！ おかしな発言はよそつか！

「魔王・・・本当に大丈夫かい？」

本当に、本当に大丈夫ではない氣がしてならない。

「そう？ いたつて冷静だけどね。」

ニコリと笑つて、ワタシをベッドに押し返した・・・いや、押し倒したの方が正しい。

「ちよつ、魔王！？」

腕は押え付けられている。魔法で・・・・・・・・・・・・

・しまつたあああああ！！

封じられてるのすっかり忘れていたあ！！

「有言実行しようかと思つて、ね？」

え、何ソレそんなの言つたつけ？

ナレッジを思い出してもいい……。

『「」のまま続ける……？』

ア レ カ ！

やつぱりキミ今日おかしいよ何か変なものでも食べたんじゃないのかな？！

若干失礼な気もしないでもない葛藤を心の中で繰り広げていた。押し倒した体勢でジツヒワタシを見ていた魔王が、胸の谷間に顔をうずめてきた。

ああああ、やあめえおおおお・・・・・変な声が出來るのを、ぞりきりで押さえ込んだ。

ふと魔王が、顔を上げて耳元に唇を近付ける。

「ねえ？ シヤノン？」

かなり甘さを含んだ低音の美声で、囁かれた。

「名前、呼んで？」

誰の・・・当然魔王のだらつ。

でもどうしてだらう物凄く今この状況では呼んじやいけない気がするのだけど・・・

「シヤノン？」

「ひやつ・・・！」

色々考えていたら、耳を甘噛みされた。

頑張つて押さえていたのにもかかわらずやはり変な声が出てしまつ。

というか今のは呼ばなかつたからか？！

いつまでも呼ばないのがいけないのか、魔王はワタシの耳を弄り始めた・・・口に含んだり、舐めたりして。

「うう、どうしようやバイイ・・・もう勘弁本当」。

「ッ・・・リ、オ。」

呼んじやつた、負け（？）を認めちやつたよ。

つて、言つかなに今の声！微妙に変に甘さを含む声だつたよ！？魔王はピクリと反応して、顔を上げてワタシを感情の読み取れない表情で見下ろす。

「リオ・・・？」

無表情が無駄に恐ろしいよ？

ふとその瞳が搖らいだと思つたら、次の瞬間には口付けられてい

た。

やはりすぐには頭が追いつかない、もう一度目だといつに我  
が事ながら間抜けだ。

そう、三度目。

けれど今回はどこか違つ、なんといつか・・・噛み付くような、  
とでもいづべきか。

彼の舌がワタシの唇をなぞつたと思えば、ソレはそのまま唇を割  
つて押し入ってきた。

「んっ・・・！」

押し返そうとするが、逆に絡め取られる。

上あごを優しく撫でられ、舌を吸われ、ゾクゾクと変な感じがす  
る。

角度を変るために少し離れては、またすぐに口付ける。  
名残惜しげに魔王がワタシから離れやつと開放された。

酸欠か、それともその行為に酔つたのか、前者であつてほしいと  
は思うがワタシの頭は霞がかかつたようだ。

なにも、考えられない・・・

ぼうと魔王を見ていると、視線の先で彼は薄く笑つた。

「・・・・・！」

「え？」

聞き取れなかつたが、彼は確かに何かを言った。

再び彼が顔を近付けてきたとき、金属の類が砕けるような音が響く。

「その音によつて、現実に引き戻される。」

「あーあ、時間切れ。残念だね？ヤミイロ、ぎりぎりセーフ？」

「ワタシにとつては完全にアウトだつたよ？」

「お前にとつてのアウトはなんなんだよ！」

「よかつたね。処女は奪われなかつたよ？」

「…………下ネタは止めて頂きたいのだが？！」

「なに、よかつた本当に！」

「好きでもない人に奪われる気は無いよ。」

「そう。」

「若干不服そなのは氣のせい、無視だ無視。とにかく、この状況をどうにかしたい。」

「せつさと退きやがれ、リオ。」

「あー…………もういいや、今日疲れたし。」

リオが口調変わつたことに面白そうに目を細めたのも氣に喰わねえし。

「無理矢理退かせば？」

「今力加減できねえぞ？」

「怒つてる？」

「疲れただけだ。」

「そ。」

「そう、ワタシは疲れると何故か口調が荒くなる。」

元いた世界でもそうだったのと、よく『怒ってる?』とよく言わ  
れた覚えがあつた。

別に怒っているわけではない、ただ紳士精神なんてどうでもよく  
なるだけであつて怒つてはいけない。

とりあえずは魔王が退いてくれたので起き上がりつて距離を一応と  
る。

「じゃあ、お・・・・ワタシはもう行く、リナ嬢とお茶会する約  
束をしていたからな。」

なんとか一人称だけは踏みどりまつた、若干言つてしまつたけれ  
ども!~!

ちなみにリナ嬢はこの間知り合つたとある貴族のお嬢様。  
物凄く美人でいい人でワタシに妙に親切なんだよ、このあいだな  
んかお揃いの腕輪くれたんだよ? 田舎者という事で放つておけない  
のだろうね。(自己解決)

「待つて。」

「あ?」

しまつた昔のくせで!~!

今までこそ穏やかな聞き返しが昔は『あ?』か『あ、あ?』だつ  
た。

「あのね? 明日がゲームの開始する日なんだよ。」

「・・・・明日? 隨分と唐突だな。」

聞いてないよ? そんな事。

「明日、僕らと勇者達は戦うよ? ヤミイロはどうするの?..」

まあ、言いたいのはそのことだつたらしい・・・しかし、ねえ?  
「どう・・・つて?」

決めてねえよそんな重大なことは! まず知らなかつたしな!~!

でも、相手のこととか全く知らないんだよねワタシ。

「前にも言ったように、相手方を見てから決めるよ。」

「そういえば前にもそんなこと言ってたね。」

うん、ワタシも今思い出した。

・(後書き)

今回短！！

そして只今『月露輝く夜』でキャラアンケート実施中です！迷惑でなければ暇な時にでも投票よろしくお願ひします！！

## キマグレ？！

「だれ？」

「え？ ヤですねー。僕ですよ？」

フード付きのティーシャツにズボンとつらつらな格好、髪も下ろしていて今は腰くらいまである。

というリショーラ嬢。

「印象変わるね・・・」

普通にかっこいいよ君、いつもそんなんないのに・・・まださらわしいから！

「これは戦闘するときだけですからね、さすがにアレは動きづらいですよ。」

そりやあ・・・そりかもね。

「おい、リショーラ。コイツも連れて行くのか？」

「そりらじいですよ？」

ワタシを指差しながら言ひのはメガネ君。

あ、今舌打ちしたね！？

「文句でもあるの？」

ああ・・・まさに魔王。

黒いマントに、まあ中はいつも通り白シャツに黒いズボンだけれども。

マントあるだけで大分違うよ、うん。その方がらしい。

「いえ、何もありません。」

メガネ君は反発できなかしねののか、ざわざわしそ黙つてくれて嬉しいよ。

「じゃあ、行こうか。」

微笑んで、この場にいる全員に囁く。

ワタシ、リショーラ嬢、メガネ君、あと新しく知り合つた蒼い髪の  
騎士団長。

彼がスイと手を動かすと、場面は一瞬で切り替わった。

おそらくは、森の中の明け地。

周囲には木々が鬱蒼と生い茂り、半径一キロくらいの円方に切り  
開かれていた。

向かい側を見ると、いつぞやの勇者。

## #マグレ?!（後書き）

そろそろ追いついてきたんで更新遅めになるかもしれません・・・

「・・・・・一人？」

そう、勇者は一人でそこにいた。

「人間の王は随分と頭の螺子が緩んでいるんだね。」

ククッと、低く魔王が笑つた。

随分な言い様だな・・・・・いやちょっと待て、今何か重要な語句があつた気がするぞ。

「王？」

聞き返すと、愉快そうにその端正な顔を歪ませている魔王と目が合つ。

「そう、アレが人王ね。まだ随分と若いけど、しつかり政はやっているらしいよ？勇者の役は自分から名乗り出たんだって。かわってるよね、僕なら王族じやなきやこんなくだらないゲームでないのに。」

若干皮肉氣味に言い放つ魔王。

ところで、いつゲームとやらは始まるのかな？

「まだ、神の使いとやらは来んのか？」

騎士団長がポツリと言つた。

気になるので聞いてみようか。

「何だい？それは・・・」

「それも知らないんだ？」

おい、今ワタシは騎士団長と話しているのだけど、何故魔王が返答する。

「騎士だ」「ゲームの進行係みたいなものだよ、ヤミイロ。」

今度はリシェラが答えた、しかも言葉を遮つて。

え、何故君たち兄弟はワタシと彼を喋らせないのかな？嫌がらせ？

「そ、そつか。ありがとうリシェラ嬢。」

今彼に嬢をつけて呼ぶかどうか迷つたがとりあえずはつけておいた、そして一応礼は言つておく。

騎士団長を見ると、可哀相なものを見るよつた田でワタシを見ていた。

え、何故？

「とりあえず、頑張れよ・・・」

騎士団長は苦笑しながら、ワタシの肩にポンッと手を置いた。すぐに離れたが。

• (後書き)

勇者馬鹿さつで実は王様でしたー。

何か近所のお兄さんみたいだ、美形だけど常識人っぽい……地味に感動して彼に若干熱い視線を送つていたら、寒気がした。

「ヤミイロ？」

肩をつかまれ引き寄せられた。

何故かサアツと血の気が引く、何も悪いことはしていないのにも関わらず。

「な、何かな？」

恐る恐る、（振り向きたくは無いが……）振り向く。

愛想笑いも引き攀るのは仕方が無いと思つて相手は魔王だもん！

「ソウが氣に入つた？」

ソウとは騎士団長のことだらう、彼を顎で指しながら言つたから。微笑んでいらっしゃるけど田が笑つていませんよ？ワアコワーリー。

・

「兄があんな感じだつたらなと思つただけだよ。」

『ふうん・・・』と、自分から聞いたくせにそれだけしか返さなかつた。

何なんだ、まったく。

「ココロが狭いねえ、魔王は。」

突然目の前に現れた、白い髪にほぼ白の青い瞳の少年。コロコロと笑つて言うが相手が相手だ、考える。そして離れる鬱陶しい！

彼はワタシの脇の下から腕を巻きつけて抱きついている、ついでに上目遣いでこちらを見上げてきた。

ワタシの肩辺りまでしか身長のない彼、胸があたつているが相手

は子どもだ氣にするな。

「ね？ そう思うでしょ？」

「（）で頷くと魔王が怖くて仕方がないのですが？

「あ、俺はアヤナだよ。よろしくね？」

ワタシだけによろしくしなくてもいいんじやないのか？

「フフッ、少年？ 離してくれ。」

「ヤ、だつてお姉さん柔らかくて気持ちいい。」

ピシッと、辺りが凍つたのはワタシの氣のせい？ 気のせいだよね！  
そしてセクハラ！？ イヤ待て相手は子どもだ、セクハラには入らない！（はず）

そして上目遣いが最強に可愛いから許せる……それもどうかと思うが無視する！

「離れてね？ アヤナ。」

おおっ魔王！ これは助けといつべきかな！？ キミ今半端なく怖いよ？ 主に瞳が怖いよ？！

「ヤツ・・・・」

いちいち可愛いなこの口。

「魔王、別にいいだろ？ 子どもなのだし・・・！」

・・・・・・・ 言い返して本当すみませんでした！…謝るからそんな氷のように冷たい視線を向けないでくれ・・・！

冷や汗が止まらないワタシから魔王はアヤナを引き剥がして、ワタシを抱き寄せた。

え、ナニ？ 頭がついていかないよさつきから…

「嫉妬なんて大人気ないね、リオ様？」

「うるさいよ？ 大人だつて嫉妬くらいするの、知らなかつた？」

そんな二人の会話は幸か不幸ワタシには聞こえなかつた。

「で？君が神の使いであつてる？」

ワタシを抱き締めたまま確認に移るな馬鹿魔王、肩に頭を乗せる  
な重い！

「うん、そうだよ？ねえ、そろそろ離してあげたら？」

「イヤだ。」

語尾に音符がつきそうな言い方だつた今。  
肩に頭を乗せるのを止めたと思つたら、更に腕に力を込めて体を  
密着させた。

く、苦しい・・・恥ずかしいとか以前に苦しいよ魔王！  
訴える気持ちで魔王を見上げたら、ニッコリ微笑まれた。  
「ま、魔王？離してくれないかな？」

「で？」

「は？」

なにが、『で？』なの魔王意味不明だからねキハ。  
「どう？ヤミイロ。どっちにつけの？」

「重大な返答を急かすな！」

勇者一目しか見てないよね！？せつきからなに嫌がらせ？！  
確かに相手を見てからとは言つたけどそれは相手の事を色々知つ  
てからという意味も含めているからね！？

しかも相手はまだ勇者しか見ていないし、まさかアレ一人じゃな  
いよね。

「今日はね？代表者が戦うから基本来るのは一人だけでいいんだ  
よ。」

ワタシの心情を察してくれたのか、アヤナが説明してくれた。  
ちなみに魔王の腕の中からは自力で抜け出しました・・・

とりあえず！これはチャンス（？）じゃないか！！

「魔王「いいよ？」まだ何も言つていないよ！？」

ナニこのコエスパー！？怖すぎるよ君！」

「ヤミイロのことだから勇者と戦つて実力みたいとか言つんでしょ？わかるよ、それくらい。」

『『いつてらつしゃい』』ヒラヒラとワタシに手を振つた。

まあ、いいつていうのならねえ。

みんなに見送られて（めがね君には睨まれた）、明け地の真ん中に向かつた。

勇者もそこについて、彼を見上げる。

「お前か・・・やはり魔王の味方か？」

若干眉間にしわを寄せながら言つ勇者に、微笑みながら返してやつた。

「それはね？キミ次第だよ、少年勇者君。」

## キマグレ？！

不敵に笑つて、そり言ひはなつワタシに勇者は怪訝そつた田を向ける。

「どうこ'う意味だ？」

「そのままの意味だよ？　さあ、始めようか。」

アヤナを見やると、一コリと微笑んで視線を返してくれた。

その笑顔には影がある、いや背後にどす黒い何かがある……。

ああ、魔王第一号（？）。

笑顔が引き攣るんですけど？

「いいよ？　けど、殺しちゃダメ。それじゃ、はじめよ。」

スッと手を動かしたと思えば辺りに結界が張られる、被害を抑えるためだろうな。

視線を、勇者に戻す。

「そちらからどうぞ？」

そう言つと、勇者は腰の剣を抜いた。

「手加減は出来いないぞ？」

「されるほど弱くはないわ。」

フツと笑つておおげさに方をすくめて見せると、わかりやすく眉をしかめる勇者。

ワタシも一応武器を出しておこう、まあワタシの場合は刀だけど。昔剣道をかじっていたし、この方が力もあまり使わずに切れるからいい。

「おいで？」

刀を構えて言うと、彼は切りかかってくる。

それを二度三度刀で受け流し（腕力ないからうけとめられない。）、体勢を崩したところを剣の柄で肩辺りに打撃を加えるがあまり効果は無いように見える。

すぐに体勢を整えると、彼は剣を地面に突き立てて何かを呴いた。すると地面が裂け、その合間から業火が噴出し竜の姿をかたどる。さすが勇者現人王、やることが違うねスケールでかい……

「行け。」

勇者が言うと同時に炎がこちらに向かう、だけどまあこの程度なら何とかできないわけでもない。

刀に冷気を纏わせ、横に薙ぐ。

竜はそこから崩れ消えた。

当然勇者の攻撃は止まないが性格が災いしているのか、どの攻撃も直球。

「ど真ん中で、単調、単純すぎて笑える。

けれどまあ、強いことには変わりないが相手が悪いね。  
(これじやあ、魔王には勝てないね。残念。)

もうそろそろ決着をつけようか……

そう思い、勇者の目の前に一瞬で出た。

「！」

「残念だね、勇者……キミの負けだ。」

多分今勇者はワタシの動きが殆んど見えていなかつただろう、だつて本氣で驚いていたからね。

刀で腹部を貫かれてからだろう、気づいたのは。

「うつわ・・・すごく痛そうだね、勇者。」

これで痛くなかったら人間じゃねえよ……冷静な自分につつこまれた。

だつて思いのほかスッパリいつちやつたからね、貫通したよ。つて、いうか止めないのかアヤナ。

## キマグレ？！（後書き）

戦闘終わるの早！！描写に関してはノーコメントですよ・・・

そして武器は刀！大好きですよ大鎌の次に好きです。

二刀か一刀かで迷いけっきょく一刀という・・・そして勇者が弱い  
わけではない、ヤミイロが強いんです。というか魔王パーティが強  
いだけ・・・

まあいいや、とりあえずどうにつけべきか判断しないといけないからね。

これは、魔王にも聞いたこと……

「キミは……何のために、戦うのかな？」

ワタシはボロボロの少年勇者を見下ろしながら聞いた。

「護る……ため、だ……」

少年は顔を上げ、ワタシを睨みながら言つ……その真つ直ぐな目を見て、ワタシ的好奇心がうずいた。

笑みを深くし、少年勇者に言つ。

「気に入つたよ、少年。」

クルリと反転し、仲間でもないのに今まで一緒にいた人達に言った。

「ワタシは勇者側につくよ……」あらの方が、退屈せずにすみそうだからね？」

おどけるように言えれば当然、抗議は言われる……頭の堅そうな眼鏡に。

「なつ……貴様、裏切る氣か！」

その言葉にワタシはクスリと冷笑する。

「裏切るもなにも、ワタシは貴方たちとお仲間になつた覚えはないよ？」

挑発的なワタシの物言いに、あちら側のボスである魔王ことリオは愉快そうに笑つた。

「いいよ？別に、僕はかまわないから。」

「さすがリオ。キミはわかっているね。」

クスクスと笑いながら、からかうように賞賛する。

「でもね？ 嘴音……」

声が間近で聞こえ、振り返る。

驚いた・・・いつのまにか、リオがすぐ前まで来ていた。

「敵側に行くのなら、僕は君を奪うから・・・覚悟しておいて、ね・・・？」

いつもはしないような妖笑で、ワタシに言った・・・

「いつておいで？ 嘎音・・・今日は見逃してあげるから。」

背を押され、彼のもとへ走りよしやがむ。

「おーい、少年にきているかい？」

彼は今にも死にそうな怪我を負っている・・・ので、確認してあげた。

ワタシって優しいだろ？

「・・・テメエがこんな怪我負わせたんだろが・・・」

うん、そうだつたね。

「はいはい大丈夫だよ、今治してあげるから・・・」

そう言い、ワタシは手を彼に向ける・・・白い光が彼を包み、怪我は全て治った。

「治療完了！ 君達の拠点はどこかな？ 少年、イメージしてくれればいいけるよ？」

少年こと勇者に言ひ。

「お前は・・・」ちら側につくのか？

「随分とマセたしゃべり方するのだね、少年勇者君？」

「はぐらかすな。質問に答えろ、ヤミイロ。」

睨んでくる少年にワタシはわざとらしく肩を竦め、答える。

「はぐらかしている気は無いのだが・・・大丈夫、ワタシはもともとあちら側についていたわけではないからね・・・面白そうな方につくつもりだったからいいのだよ。」

フードでみえないかもしぬないが、一応困ったような表情を作つておいた。

「信用、出来るのか？」

あらかさまに疑つてくる少年に、ゆづくつと言つた。

「あなた方が裏切らないかぎりは・・・・ね。」

少年はフッと笑い、差し伸べたワタシの手をとった。

少年を立ち上がらせ、魔王組の方を振り返り、フードは外さずに

一ヶ口りと笑つた。

「ワタシの名は、悲月嘎音・・・勇者側につくよ。」

• (後書き)

物語が動き出しました、うん、それはいいが・・・どうしよう...?  
?終わっちゃった!-!-! (@ @ : )  
連載に追いつきやうよ、といつかもう次更新したら完璧追いつく。  
どうしよう...・・・

## キマグレ？！

ところまで言つて気がついた。

「アヤネ、もう今日はいいのかい？」

「ん？うん、いいよ。もう目的は達成したし、一応ね。」

「…………」のこわつきから笑顔しか浮かべていな  
いね。

不信感よりも感心の方が勝るよ。

「じゃあ、帰ろうか。勇者？」

フラフラしているけど大丈夫だよね、びくびく血を流していたせ  
いだらうけど。

うん、傷は完璧に治したからワタシは何も悪くない！よし解決！

「なるべく動かないほうがいいね、とつとと行こうか。」

こんなふうに言つてはいるが一応気遣つているつもりだ。  
少年の肩を支えて魔法を使う、最後に魔王を見た時に不吉な笑顔  
でこちらを見ていたのは気のせいだと思いたい。

ところ変わつて切り替わつた場面は人王城の王の、つまりは少年勇  
者の私室。

「はあ……」

「どうした？」

「いや、ナンデモナイヨ。」

別に目の前に女装しているっぽい変体そうな人がいるーなんて思  
つてないよ、きっと女装じゃないのだようんそう違つことを願おう。

「ああ……目の前にいる白髪は女装趣味の変態だから氣を付  
けろ。」

百歩譲つて変態はよしてほしかつたかな。

「やあんつ酷いわー王様あ、変態だなんて～あたし傷ついたわあ。

全然傷ついたよつには見えないが・・・白髪に明るい茶色の彼は見かけ和服美少女。

でもほら凹凸がさ、リシェラ嬢みたいによくわからない服をいたらいいけど、その服よくみたらわかつちやうよ。

しかも高身長だし、美人で細く見えるけど多分勇者より身長高いし。

「まあいいけどお・・・」の「誰」？

抱き付かれだし。

「ツ！離れてくれないかな？お嬢さん。」

「きやあ〜』お嬢さん』だつてえ！それになにこの『すくなく抱き『じゅうせい』いいんですけど！」

離れてほしんですけど！そして勇者助けてくれてもいいんじゃないのかな？！

「巻き込まれたくないからな・・・」

ワタシの思いを汲み取った誰かが彼を引き剥がしながら、そう返してくれた。

「申し訳ございません、嘎音殿。伽羅の無礼をお許しください。  
私は拘<sup>ワタクシ</sup>と申します、以後お見知りおきを。」

何かすごい人きたね。

艶やかな濃い紫の長髪を後ろの肩辺りで緩く束ねている、切れ長の瞳は同色で陰陽師みたいな人だ。（格好が）

美形な所を除けば常識通じそう、通じてほしいなーがちょっと疑問が。

「どうしてワタシの名を知っているのかな？」

「見ていましたから、当然ですよ。」

見ていたって、どうやって？というかいつから？そこはかとなく嫌な予感がするのは気のせいかな？

「私は王の補佐。彼を心配して、常に監視をするのはあたり前でしょ？」「

過保護を通り越していく気がするのはワタシだけ？といつか常に

ということは、勇者が魔王城に来た時も？

「それに私は少々人より五感が優れておりまして、ずっと見えていましたよ。」

そう言いながら近付いてきて、ワタシを抱き寄せた。

「そのヤハリロのロープに溶け込みそうな漆黒の髪がね・・・」

## キマグレ？！（後書き）

丁寧語の常識人のはずがああああ！！  
いやー常識人がでてくるのは一体いつでしょうねー・・・というか  
ここでも女装男子。  
ださないつもりだったのですが・・・

## 番外・ある日の昼下がり

「……魔王？」

昼下がり、丁度良い日差しに心地よい風。外を……といつても城の庭だが。

散歩していたら、木の陰で眠っている魔王を見つけた。そんなにも心地よい場所で眠っているにも関わらず、魔王はうなされていた……

「魔王？ 大丈夫かい？」

彼の顔に汗で張り付いた髪を払いながら聞く。

「んっ……ヤミイロ……？」

魔王が目を開け、キレイな深紅の瞳と目が合つ……フードで相手からは見えないだろうけど。

「うなされていたよ、大丈……！」

……驚いた。

急に抱き寄せられたから……

「魔……王？」

彼の体は妙に冷めている……おそらく、恐怖で。

「魔『僕の名はリオだよ……シャノン。』」

声は、力なく震えていた。

見上げると、彼は苦しそうな、悲しそうな表情。

「リオ……悪夢を、見たのだね？」

「うん……怖い……とても怖い夢だよ。」

ギュッと、ワタシを抱く腕に力が入った……その腕も、わずかに震えていた。

抱き返し、なだめるように背を撫ぜる。

「大丈夫だよ、リオ。ここにその悪夢はないから……大丈夫。

安心してね？」

そう言つと、だんだんと震えは止まつていった。

「シャノン・・・」

「何だい?」

「歌、うたつて?」

「ああ・・・いいよ?」

微笑んで、返事をする。

暫くうたつていたら、上から寝息が聞こえた・・・

(今だけは、いい夢を・・・)

## 番外・ある日の墨下がり（後書き）

そういうえば主人公って、声だけは！（ここ強調）きれいな設定だった！

と思い出したりしなかつたりしたりして（どうちだよ）書いてたと思います。

こつちでは番外をしPしていなかつたなど・・・なんで明日も投稿します！

・

「！」

ワタシにしか聞こえないよう囁いた。

どんだけ視力優れているのか、フードを被つて完璧に隠せるわけはないが色も色なので黒髪は色にまぎれて見えないはずだ。

「王、一人きりでお話したい事がござりますので・・・よろしいですか？」

いつのまにか離れていた拘が勇者に言ひへ。

「ああ・・・だがそいつは仲間だ、手荒なマネはするな。」

「わかつております。」

いやいや少年勇者よそこは断つてほしかったな、だつてこの人のワタシに対する態度というか雰囲気が違うこと察せよ。

という心の中の葛藤は匪かずに、ほとんど引きずられるかたちで部屋から退出させられた。

「昼間から女性を部屋に招きいれるのは初めてですね。」

しばらく廊下を歩いて階段を下つてついた部屋に入つたときに、彼が後ろ手で障子を閉めながらそう言った。（なんと人王城は和風！）

このときもれなくドン引きしたのは言つまでもないだろ？

「そんなに引かないでいただけますか？泣かせたくなるではありますか。」

おかしいだろ！

駄目だこの人全然常識人なんかじゃない！どうしてワタシの周りには常識人がいないのかな！？

「いいですけどね、本題に入りましょうか。」

「さいですか・・・」

最近笑顔が引き攣ることが多い気がする、うんこれは気のせいじやないよ絶対。

そしてこの人さつきからずっと無表情で一回りともしないね、それで近付かれるとかホラーだから！ホラーなみに怖いから！！魔王みたいに笑顔で近付かれても怖いけどさー！

「な、何で近付いてくるのかな？」

「別にいいでしょう。」

「イヤイヤイヤあかしいよ。」

微笑むところが違うー！ここでーここで微笑むのー？怖さ倍増！！！

トンツ

『お約束』そんな言葉が頭をよぎった。

• (後書き)

背後に壁はお約束。 気のせいじゃありませんー腹黒が獲物を逃すわけがない！

## 番外・鈍い彼女

「魔王は結婚しないのかい？」

「は？」

突然なにを言い出すのこの口。

「いや、魔王の歳ならもう結婚していくても可笑しくはないだろう？」

僕はまだ十八だけど・・・そうだね。  
たしかに、王の婚姻は早い。

先代の人達も十代で結婚していたらしいし・・・

「僕が結婚していたらどうなの？」

気になつたから聞いてみた。

「ん〜・・・そうだね、奥さんと友達になりたいね。」「なんで？」

「キミのお嫁さんだからきっと可愛い口なのだろうなと思つてね  
？ホラ、ワタシ可愛い口大好きだから。」

・・・なんかイラッときた。

なんでヤミイロはいつも鈍感なのかな・・・他のコトの関しては  
鋭いのに・・・

今だつて・・・「口は僕の自室。

呼んだのは僕だけど、鍵閉めたり近づいたりしていつも思わない  
つてどうなの？

「どうしたのかな？魔王・・・急に不機嫌になつたね。」

ホラ、こういうコトは気付くのに肝心な部分だけは気付かない。  
いつそのこと、奪つてしまえばいいとも思う・・・

けど、彼女には魔力の無効化がきかない。

それほど、彼女の魔力は強大だから・・・だからどんなに男女の  
力の差があつても、彼女を押さえ込むのは無理。

きっと、普通に闘つて勝つのはヤミイロの方だ……まあ本気になれば勝つのは僕だけだね。

「ねえ、ヤミイロ……」

呼んで、彼女を引き寄せて……そのまま彼女に口付けた。深くしそうになるのを、ギリギリの理性で押し留める。

「ツ……キミは……なんで、いつもそつ突然なんだ!…」

顔を赤くして言つヤミイロ。

その反応が可愛くて、クスクスと笑ってしまう。

「これくらいで赤くなつて、可愛い。」

言えば、更に顔を赤くさせる彼女……

ねえ、ヤミイロ? 僕がどれだけ我慢しているか、知っている?

番外・鈍い彼女（後書き）

リオーーーーー！思考がちょっとR-15だぞコノヤロウ！  
と心中で突つ込みながらもリオ視点が一番書きやすい・・・；  
一応ヒーローがこれでいいのかと最近疑問に・・・；

なんでワタシの背後には必ず壁があるんだあああああ！いやあた

「前の事がにれ、中風があるで、もしもいり、ないが、うわあ、デジャブ、凄いデジャブを感じるー、気のせいー? ワタシだけ!?

「もうお逃げにならないのですか？」

見りや わかるだろが、言いながら手を壁につくな囮つな微笑むな  
ああああ ！！

しかも目が笑っていないよ?ハツハツハツ冷や汗が止まらないよ  
ワタシ。

「丁度、一〇時頃でござるが、お仕事はござりますまい？」

卷之三

「本題とは関係ないだろ？」

「やがてやがて」

いや知らないよ！言っちゃってなんだけどキミが言つてる本題つ  
知らないからね？！

それはいいから早く離れてくれ・・・！

と詰いながら「タジの髪を人房手はどる  
村廿て（うつあ・・・）、二ちのじ隕隕々

いとおもいますか・・・「

過剩裝飾にもほどがある！

い  
る。

「フフツ、その過剰な装飾語に鳥肌が立ちそつだからやめてくれないか？」

ホラホラ現に寒気がもよおされているよ。

「本当の事を言つているまでですがねえ・・・おや？瞳も黒いのですね。」

「はつ！？」

「いいいいいつの間に！」

いつのまにかフードが下げられていて、拘の皿とばしあり合っていた。

「その黒曜石の瞳が涙に濡れたら、どんなに美しいでしょうね・・」

装飾語でうつかり聞き逃しそうになるがソレ、泣かせるつて言つているよね？」「ワッ！」

顔近いよ、吐息がかつてゐよ、装飾語が過剰だよ誰か助ける！-！

「嘎音ど「いい加減にしろ色ボケ補佐。」

拘の眉が大変不服そうに寄せられ、その肩越しに見れば少年勇者。ありがとうさすが勇者で現人王、心の底から感謝するよ！

「まさかとは思つたがさつそくか・・・呆れを通り越して感心するぞお前。」

「早めに捕まえておかないと、逃げられてしまつてしまつ。」

「そんな考えは燃えるゴリにでも出しどけ。」

取り付く島もない勇者に苦笑して拘はやつとワタシから離れた。

「それで？拘、お前がわざわざ私室に引き込んでまでコイツと話したかったわけは何だ？」

勇者ワタシの色とか気にしないんだね、といふか忘れられてないよね？一人だけで話してるよ？

とりあえずもう見られたからといつてこつまでもフードを下ろしつぱなしというのもなんなので被りなおしておいた。

「嘎音殿・・・

「はい？」

急に話を振らないでくれないかな、地味に混乱するからね？

「貴女は『異世界からの訪問者で間違いないですよね?』

」の問いに、ワタシが更に混乱したのはいつまでもないだろ。

• (後書き)

勇者のおかげでR-15はまぬがれました！…そして早速ばれてます。

そしてとつとつ走りこいつにちやつたぜどりするよ…たぶん一週間に一度くらべのペースでいくと思します、投稿…！

えーと…とりあえずあてずっぽうで言つたわけじゃないよね、うん。

「まかしてもすぐにばれるだろうし、正直に言つのが得策か…。魔王の時のがあってがちょっとトラウマ気味だしね。

「そ「おい、行くぞ。」

遮つたのは勇者で、ワタシの手を取つて部屋から連れ出した。え？ は？ 何勇者ワタシのせっかく決心したのにセリフを遮るってどういうことだい？

それとさつきから混乱しつぱなしでちょっと気に喰わない。

しばらく無言で歩いていたが、部屋から大分離れて立ち止まった。「いいか？ お前が『異世界からの訪問者』っていうのはなるべく伏せておけ。魔王のところはどうか知らんが、俺のまわりはわりと過激な奴らが多い…。閉じ込められたくなきや言わないことだ。」「…物騒だね、凄く。

え？ 何？ もしかしなくてさつき結構危なかつた？ そう考えると、血の気が引いた。

「気づいているのは、キミと拘だけかい？」

ていうかキミこいつから気づいていたの、そんな素振り見せなかつたけどね。

さすが王、とでも言つべきなのかな…。

「そうだな、最初から気づいていたぞ？」「はあ！？」

早いにも程があるよ？ 何ソレ！ 全然気づかれていたなんて知らなかつたよ！？ もしかして勇者、あの時の動搖に気がついていたのか…。

・？

「なんとなく。」

そんなわけなかつたか。

うん、まさかの回答だよ勇者それは予想していなかつたかな。

「そうか、そうだよね、キミだもんね・・・」

「なにがだよ、意味わかんねー。」

なんで一々つづかかるのかな、まあ面白いしわかつていて言っているのだけどね。

「おい。」

「何かな？」

急に真剣な顔して、不思議に思つて聞き返したら背中から衝撃がきた。

「背後に気をつける、と・・・」

「嘎音ちゃん見つけー！」

「もつと早く言え！」

少なくとも抱きつかれる前に！

「や～ん、嘎音ちゃんいい～オイする～」

人間だよねキミーえ？なんだかどこぞの吸血鬼みたいなこと言つているよ！？誰かとは言わないけど！～

とりあえず勇者、助けてくれ。

目で訴えたら彼女（？）を引き剥がしてくれた。

おお！なんか意思疎通できたことが地味に感動できるね、なんか目で訴えて伝わってその通りに動いてくれる人が少ないから・・・むしろ逆に動く人が多かつたね。

それにしても、さ。

「へ、変態つてど～にでもいるものだね・・・」

「俺は違うからな。」

それくらいわかるよ。

キミが変態とかだつたらワタシどうすればいいの、かなり凹むと思うよ。

「え～？王様も結構性生活荒れてるじゃない。一人だけ常識人ぶるとかサ・イ・ア・ク」

聞かなかつたことにしよう。

・(後書き)

遅い上に短くてすみません！！

番外・恋する乙女の暴走(?)（前書き）

ユニークが60000越え！といつわけで番外！！読者様方に大感謝  
！！

べ、別に本編が進まないからっていうわけじゃないんだからね！  
うん、自分でも馬鹿っぽいと思っていますよ！（+ + ;）

ベターなようでベタージゃない惚れ薬ネタです！

## 番外・恋する乙女の暴走(?)

「好き、リオ……」

「嬉しいけどね、何食べたのヤミイロ。」

わかんないよ！口と体が勝手に動くんだったで！！  
はい突然の告白に動搖の片鱗も見せないリオに若干のイラつきを感じながらも内心焦りまくつている今現在。

というか告白されて『何食べたの？』って酷くない！？  
さあ何故こうなった！？と自問自答しても答えは見つかるはずもなく、一生懸命勝手に動く体からコントロールを取り戻そうと奮闘中（内心で）。

「愛してる。」

「そう？」

ねえキミ若干楽しんでいるふちあるよね？ワタシがこんなに大変なことになつてているのに何クスクス笑つてんの！？

そうこう言つていて（…）うちにワタシは（体が勝手に）腕をリオの首にまわして自分からキスをした。

あり得ないから、本気でありえないよちよつと何しゃつてんの  
おおおお！？

目を瞑っているからわからないけど無抵抗つてぢうこいつとかなりオ。

しかも暫くすると薄く開いた唇から舌を滑り込ませた。

「んっ・・・ふう・・・・・」

頼むから耳を塞がせてくれ。

吐息交じりの声もいやらしい水音も、自分が（体が勝手にだとしても！）させているのは耐えられない。  
いや、他人のだとしてもだけど！

早く離れるといつ願いが通じたのか（こや違うと思ひナビー）も  
つと離れたと思ったらどんでもない一言言こやがつた。

「抱いて？リオ。」

ありえねええええ！……イヤイヤイヤイヤイヤ何これ、何コレ  
！なんの羞恥プレイ！？

「直球のお誘いだね、いいよ？シャノン。」

そこには断れよ！

心の中でシシコミが届くはずもなく、彼はスタスタビッドまで行くとそこに腰掛けた。

「おいで？」

誰がいくか死んでも行きたくないといつ葛藤も虚じて口では出せ  
ない。

ワタシの体はやはり勝手に動いて、彼のもとへ行く。

「優しく、してね？」

「多分ね？」

何を口走っているんだ！そしてリオ多分って何だよ多分って！  
そうシシコミをこられるがもうワタシはベッドの上だし、リオは馬  
乗りになつてワタシに覆いかぶさるようになる。

「リオ、好き。愛してる・・・」

「僕もだよ？シャノン。」

そこそう答えるの！？

とりあえず本氣で危なくなってきた、主にワタシの貞操が。

リオはワタシのシャツのボタンを、ゆっくり一つづつ外していく。  
これはアレだ、嫌がらせだろ絶対！ゆっくり焦らすようにしてい  
るのはワタシの羞恥心煽るためだろ！

「ん・・・・・」

ボタンを外し終わると彼は下着のホックを外して手を滑り込ませ  
て何もつけていないワタシの胸をゆっくり揉んだ。

たちが悪いことにコントロールできなくせに感覚はあって、吸  
血時よりは幾分か弱いが甘い痺れがあそぶ。

リオが首筋を、少し噛んだ。

「シャノン？ もう動けると思つんだけど……それともこのまま  
続けたほうがいい？」

「そんなわけないだろ！」

「…………アレ？」

「喋れる…………？」

「そ、じゃあ 続けようか？」

「だから何故そつな、んんっ！」

先ほどの行為でたつていた胸の先端を摘まれた。

「ホラ、こんなに感じてるんだから、いいでしょ？」

「よ、くな…………ああんっ…………」

また敏感になつてゐるところを攻められる。

いい加減にしろと睨むが、涙田と上氣した頬では迫力皆無だらう。

「誘つたのはシャノンでしょ？」

「違うから！」

「」の後『見逃してあげるのは今回だけね。』と、どうにかギリギ  
リセーフ（？）でワタシの真操は守り抜けた。

\* \* \* \* \*

ちなみにワタシのあの変貌といつかアレは、ワタシを慕つ（？）  
とある貴族令嬢が盛つた惚れ薬もどきが原因らしい。

「Jのことは魔王から聞いたのだけれど、なんといつか……うん、  
無駄に笑顔が輝いていたよ！」

番外・恋する乙女の暴走(?)（後書き）

はい、惚れ薬セイエイネタでしたー！

もどきつていうのはアレですよ、ホラ惚れ薬つて本当に惚れちゃうじゃないですか（多分）でもこの場合体だけ勝手に動いちゃってますからねー・・・シャノンちゃんがリオにベタ惚れとか現時点ではちょっと・・・『は、吐き気があ・・・』みたいな？はいやっぱり一生懸命拒絕っていうのが好きなんです俺！そう簡単に両思いになられてもつまらないんです！

というわけで焦れ焦れというかまあリオにはガンガン攻めてもらいますが、その他もろもろのメンバーも・・・逆ハーですの！番外で書いてほしいのがあつたりしたら言つてもらえると嬉しいです！！

これからも見捨てずよろしくお願いします！

## キマグレ？！（前書き）

キマグレ？？の区切りが微妙だったんで？に付けてとこいつ形にて  
しました。

本当すみません！！

## キマグレ？！

誰かが髪を梳いている感覚、しばらくするとそれは消えて今度はワタシの存在を確かめるように頬から首筋にかけて・・・おそらくは誰かの手の甲だろう、それが滑る。

フワリと柔らかいものが押し当てられる、額に、頬に、瞼に、首筋に・・・そしてそれが唇に押し当てられたときに、キスをされているのだと気がつく。

「！？」

驚きのあまりパチリと目を開けた。

「あ、起きちゃった？」

「！？？？？なつ・・・・！？」

なんで！？

唇をつくつかないかくらいの距離で、いるはずのない人物がいてしかもなんかさつきまでキスされまくって・・・なんで起きなかつたワタシ！！

「魔、ムグッ・・・」

口を手で塞がれた、しかも結構乱暴に。

口を塞いだ本人は口元に人差し指を当てて、面白そうに微笑んだ。久しぶりというほどでもないが、紅い瞳が間近に合ってドキリと・・・してない！気のせいだよ！？うん、これはアレだ、吊り橋効果？つて違う！

「シー。静かにしないと声出なくなるくらい酷くするよ？優しくされたいでしょ？シャノン。」

なにを！？今朝！朝だよね！？いや夜でも”遠慮願いたいけども！！”

とりあえず目が本気になつていてるよ？やめようか笑えないって！  
その微笑方はぜひ止めていただきたい！

「これは頷くべきなのか？それとも横に首を振るべきなのか？！少なくともどちらの反応を示してもワタシに明るい未来（？）はない！」

そんなこんなで動けなくなつていたワタシに何を思つたのかは謎だが、とりあえず魔王は手を退かしてくれた。

つて、いうか何で魔王いるの。

昨日は確かあの後勇者に『今日はもう遅いし疲れているだろ？から寝る。』って言われて用意された部屋に行つた。  
和室だつたからフリーイ布団だーみたいな勢いで（うん、やっぱり布団がいいね。）用意されていた寝間着みたいな薄くて白い浴衣を着てさつさと寝た。

で朝起きてこの状況はなんだああああ！！

「いつまで寝てるの、それとも誘『そんなわけがないだろ？！？今すぐ起きるよ。』

魔王の言葉を遮りながら光速で起き上がつた。

それはもう目の前にいた魔王に頭突きする勢いで、当然の「」とく避けられたけどさー

もうしばらく会えないと思つていたのに・・・・くつ、不覚。

「どうしてそんなに『会いたくなかった』みたいな顔してるの？僕はすごく嬉しいのに。イロイロできたしね・・・」

色々？イロイロ？！なにしたのキミー意味深な微笑みはやめてくれ。

「もうそろそろ誰かくるね・・・またね？シャノン。」

そう言って、立ち上がる。

ふとワタシを頭から足先まで見て極上の笑顔を浮かべた。

うつ、胸焼けしそうな甘さ・・・

「シャノンって中々寝相悪いよね、足とか胸とかかなりアブナイよ？」

そう言われて自分を見下ろすがたしかにこれはやばい、胸元とかはだけているし足はスリットがはいつたみたいに太ももが見えている。

慌てて直すワタシを見て、クスリと魔王が笑った（極上の笑顔の今まで）。

「僕以外の人には見せないでね？お仕置きするよ？」

『それはそれでいいけどね。』とワタシを一瞥して今度こそフツと姿を消した。

よし、絶対に他人には見せないようにしよう！などと心のうちで硬く決意をしたとほぼ同時に襖が開かれる。

魔王と入れ替わるように姿を現したのは、拘だった。

## キマグレ？！（後書き）

口は口で塞がせたかつた・・・（ヲイ）  
でもそんなことしたらリオがまた暴走しちゃつてそれまちよつと  
という事で止めました！

やつと？だぜ・・・早く魔王城に行かせたいなーみたいな。  
そして勇者があまりにも哀れ！！全然アピール出来てないし！まず  
フラグたつてないっぽいし！.. 勇者名前すらでてない！！！  
あ、悲しすぎて涙が・・・本当可哀想なんでその内出してやります・  
・

「嘎音殿は随分と寝相が良いようですね、誠に残念です。」

おい、何故だか本当に残念そうに見えるのだが？気のせいだとい  
いな！？」

「先程まで何方どなたとお話しておられたのです？」

「は？」

その間に、ワタシは固まつた。

何故わかつた？というか、もしかして盗み聞きとかしてないよね  
！？

「いるはずの無い下賤な魔のニオイ、それも高位の・・・」  
あいつ！来るなら来るで痕跡とか消していけよ！被害くらうのは  
ワタシなのだよ！？

ホラホラホラ、拘が悪い笑みを浮かべているよ？確實に何かたく  
らんでいらっしゃるよ？ってかもう殺されそう！！

そろりと田を逸らすと顎をつかまれ無理矢理視線をあわせられた。  
いつのまにこんな近くにきていたのか拘はもうすぐ田の前、唇が  
くつついてしまいそうだ。

「答えて、頂けますね？」

これはもう命令だ。

何故って、コイツはもう聞いているのではない・・・確信してい  
る。

だが正直に答えるのもどうかと思つから絶対に答えてやるものか  
と思つてしまう。

「わあ、なんのことかな。気のせいじゃないか？」

別に死にたいわけではないけど、コイツが魔王なら魔王側に味方  
するかな。

・・・・・・・・沈黙が痛いよ。

けれどワタシが浮かべている笑顔は引き攣つてはいない（と思い

たい)。

しばらへ見詰め合ひて(睨み合ひて)いたが、先に口を開いた。

「まさか魔王に、恋情など抱いていませんよね?」

「微塵も。」

唐突な上に意味不明だし、即答した。

イヤ、意味はわかるよ?でもどこでやつ細つのおかしこよね?レンジョウってアレだよね。

蓮杖じゃなくて連声じゃなくて恋情?ナイナイナイナイ。有り得ない。

「では何故、彼を庇うのです?」

ワタシはワタシしか庇わないよ、絶対。

むしろ魔王なら庇うことなく突き出す!え?非道?そんなことはないよ、それくらいしてもいい氣がするよ?被害者だもんワタシ。

「ワタシは自分に利益のある発言しかしないのだよ?氣づいていなかつたのかな?」

二口りと笑つて答えてやると、拘は小さく微笑んだ。

「そうでしたか?そのわりにはボロが出ている氣もいなめませんが?」

クツ・・・痛いところを。

確かにそうだが、十八の平凡な女子高生に完璧を求めないでくれ。

・・アレ?ふと思つたけどワタシ平凡の枠外してる?

氣を確かに持てワタシ、ここで認めてしまえば本当に外れてしまうぞ。

黙りこくつてしまつたワタシに何を思つたかはしらないが、むしろコイツの思考なんぞ理解したくもないが、拘が顎をつかんでいた手を離す。

と、ここで油断してしまつたのがいけなかつた。

「・・・！」

「隙だらけですね、嘎音殿？」

唇に残る僅かな熱は・・・・考へたくもない。

何か言つてやらないと気がすまないと口を開いたがもうすでに時  
遅く、拘は部屋を出て行つた後だつた。

• (後書き)

アレ? シャノンちゃんが酷いぞ? 本当はわりとお人よしなんですが。  
・  
といつかシャノンちゃん、リオに関して結構酷い?  
そのうち変わる...。多分。

## #マグレ?!（前書き）

しまつたああああああ！…申し訳あつません一日遅れてしまいまし  
た！…しかも短いし！  
次はちゃんとします。

## キマグレ？！

ぱくぱくと独り口を開閉していたが、冷静になれワタシ。フツと息ついて額に手をあてて首を左右にゆるく振った。そして、目に留まつた紙。

拾い上げて見てみると文字が書いてあり、こう書いてあった。

『浮氣はダメだよ。』

・・・・・・・・・・・・見られた？

いやちよつと待てなんでワタシが焦らなければならぬ？…まず浮氣つてなんだよ！！

しばらくそうしていたがよく考えてみるあの魔王だ、わかるわけがないだろう！

わかつてしまつたら変態の仲間入り？それだけは嫌だ、嫌過ぎる。

「嘎音様？入つてもよろしいでしょうか？」

鈴を転がしたような澄んだ声が外から聞こえた。声の高さから女性だとわかる。

女性を待たせるわけにはいかないので急いでローブをはおつてフードも深くかぶる。

「もういいよっ。どうぞ。」

「失礼します。」

そう言つて入ってきたのは明るい茶髪を左に流して結っている和服美人さん。

穏やかな笑みをたたえてワタシと目を合わせると、より笑みを深めた。

「おはよひ〜ぞこひります。わたし、今日から嘎音様の身の回りのお金話をさせて頂きます夕鶴と申します。」

ペコリと腰を折り曲げてこれまで丁寧に挨拶してくれたが、頭をさげるのはやめて頂きたいな。

「いいよ、そんな丁寧に挨拶しなくても・・・後世話係なんていらないよ。」

「拘様からの命令なので。」

苦笑しながら断つたら即答された。

拘からの・・・ね。監視のつもりかな。

けれど美人さんの笑顔はいいね、癒されるよ？輝かしい笑顔が誰かと一瞬被ったように見えたのはきっと気のせいだ！

アレとは違つて癒しオーラ出でているしね、まず性別違うし。

## キマグレ？！（後書き）

新キャラ（？）登場！

シャノンはリオのことをそれなりには意識しているみたいですね。  
浮気現場（リオ視点）を見られて焦るくらいには・・・本人は自覚  
無いっぽい。

と、言つた人間ですらないしね・・・

「えうへ・じやあよろしくね。してもらひことなんてないと思つけ  
ど。」

そう言つてニーッコリと笑つたら夕鶴嬢も笑い返してくれた。  
ほんわかとした空氣の中声もかけられずに襖が開かれ、そこから  
出てきたのは少年勇者。

「やあ、おはよう少「いい加減それはやめろ!」

切り返しが早いねさすが少年、朝から元氣でいいよ。

「少年、そういうえば名前聞いていないね。」

「今更だな」

本當今更だよね、気づかなかつたワタシって結構酷いのかな?まあいいよね勇者だし、少年だし。

「お前今失礼なこと考えてたろ。」

「イヤ別に?で、名前は?」

アレ?なんでわかつたのかな? いまだ納得のいかなぞそつな顔を  
している勇者はこのさい無視だ。  
というか本当に勇者の本名気になる。

このお城和風だからまさか横文字じゃなくて漢字かな、この金髪  
碧眼のいかにも勇者! みたいな彼が。

「佐紺雪體サノンユキシロ」

・・・・・・・・・・・・渋つ!

純日本人、むしろ一昔前にいそうな名前! え? なに、この国で金  
髪碧眼つて普通なの? ! !

ワタシよりも日本人らしい名前に少し驚いてしまったよ・・・

「では少年。」

「少年じゃねえ！なんでおえた傍から名前でよばねえんだよ……。」

「イヤ、やつぱり少年は少年でいいかなって……ね？」

だつて『雪瞳』だよ？金髪碧眼の見かけ完璧勇者な彼が『雪瞳』

！抗あらまくつだからね！？

「コツキー？」

「なんでだ。」

「コキ？」

「お前俺の名前もう忘れたのか？」

「シロ？」

「犬か。」

どれも結構きつかったね、うん自覚なりあるー。

「まあいいや。雪瞳。」

「何か自己解決したな。何だ？」

「いや、キミに何の用で来たのかな？」

まさかわざわざお前呼びにさせに来たわけじゃないよね、そういう  
ら殴るよ？タ鶴嬢との時間を返せ。

「少し忠告しな。」

忠告？して貰うよ？なことほないとと思うのだけど、彼の言ひこと  
なのだから一応聞いておこうかな。唯一の常識人（と信じたい）だ  
し。

来いと手招きをする雪瞳に近付いていたら、急に腕を引っ張ら  
れ彼に抱き込まれるかたちになつた。

「そこの女には注意しつけ。」

耳元でそう言われ驚いて顔を上げると、真剣な表情の雪瞳。  
くっ、じつして見ると彼もかなり整つた顔をしている……。  
ムカツクくらー。」

「つ！急になにしやがる！」

とりあえず一発殴つておいた。



• (後書き)

やつとでてきた勇者の名前！かなり考えた結果が『雪崩』……  
そして勇者にはフラグたつているのか……？ととりあえず何かとアクシ  
ヨンおこしてほしい！逆ハーダからね……！

## キマグレ？！

「嘎音様お風呂の準備が出来ていますが・・・如何致します？」  
勇者を追い出してしばらくしたら、いつの間にか部屋から出て行つていた夕鶴嬢が戻つてきてそう言つた。

そういえば昨日から色々あつて入つてなかつたね・・・現代の女子高生としてこれはどうしたものだろ？

うんお言葉に甘えよう！

「うん、入りたいな。案内してもらえる？」

昨日から入つていないというのは伏せておく。いやだつて言いにくいじやないか、ねえ？複雑な乙女心というものだよ！  
うん、自分で言つて意味わからなくなつたよ。

「いらっしゃりぞります。」

と、ついたのは暖簾のかけられた入り口。

それをぐぐると広い脱衣所・・・無駄に広くないですか？

「あの？」

着替えたいのですが何故あなたはいつまでも口チラを見つめいらっしゃるのでしょうか？

いや、女同士だから別にいいとは思うのだけれどね？こんな美人さんに見せられるほど自信ない！みせるつもりはない！むしろ見られたくないよ？！

「ああ、お一人でよろしいので？」

「是非そうさせてください！」

お察しがよろしいですね！

「なにかありましたらお呼びください。」

必死そうなワタシがおかしいのか、クスクスと笑つて出て行つてくれた。

服を脱いで（一応）タオルっぽいのを巻いて風呂場への扉を開ける。

（広ひ・・・・！）

どこの大浴場ですか？！みたいなかんじのお風呂でした。さすが王城、『お風呂』のスケールが違うね！

魔王城は部屋にシャワールームがついていたから・・・それでも十分凄いのだけれどね。

「アレ？」

どうしよう使い方わからない。

なんかね、シャワーみたいのはあるのだが。風呂とはちがつて髪とか体とか洗い流すためみたいなやつ。

でも、蛇口がない。

「嘎音様？」

「わあっ！！」

よよよよよかつた、タオルまいていて！

「け・気配を消して背後に立たないでくれるかな？夕鶴嬢。」

どうしてみんな気配消すのが上手なのかな！？（今更）

後ろを振り返るとニツコリと笑顔を浮かべた夕鶴嬢。・・・誰かさんを連想させそうなその笑顔はやめてください。

「申し訳ございません、癖で……その使い方がわからないのですよね？」

「どんな癖？！そしてどうしてわかつたの、君エスパー？」

とりあえず、わからないので素直に教えてもらつことにした。

「こちらにお座り下さい。」

シャワー（もどき）の説明をしてもらつたら、いつの間にか小さな椅子が用意されていた。

手際いいなとか思いつつ座らせてもらつ。

「お背中お流しますね。」

「うん……つてちょっと待つて……！」

サラリと言うものだからつい肯定しちゃつたよ……すごいねべテランさん効果。

キヨトンとする夕鶴嬢、可愛いな。じゃなくて！

「自分で洗えるから、ね？」

苦笑しながら言つと、ワタシの笑顔なんか霞むような輝かしい満面の笑顔でスッパリ返された。

「これくらいさせて下さい。」

大人しくされるがままにした方がよさそうだね。

「髪だけ……お願いしたいな。」「体は無理。

「はい。」

渋々ながらも承諾してくれた。それを表情に出さないのが凄いね。木で出来た棚から瓶を取り出すと、それに入つていた淡い蜂蜜色の液体を髪に馴染ませた。

ほのかに甘い香りがする。

「コレ、何なのかな？」

「髪をキレイにするものです。匂いもいいでしょ?」

「うん。好きだな、この匂い。」

丹念に馴染ませた後は、これまた丁寧に洗い流してくれた。

髪の水を絞つて軽く梳いてくれていた夕鶴嬢の手が、ふと止まる。

「？ 夕鶴嬢？」

「嘎音様のお髪、とてもお綺麗ですね・・・ずっと触っていたくなります。」

うつとりとしたように声を夕鶴嬢、いつたい急にどうしたというのかな?

髪を梳いていた手が両肩に置かれた。が、おかしい。

その置かれた手は柔らかい女の人の手じゃなく、大きく骨ばった

男の人の手。

ひしひしと嫌な予感はするが外れて欲しいと、振り返りみたのは深紅の瞳。

「ねえ？シャノン。」

「...!...!...?...?」

驚きのあまり大声を出しそうになつたが口を塞がれて無理だつた。  
ちよつは?なんで!?夕鶴嬢は?!

この状況からしてその答えは一つしか導き出されないが、一応聞いてみようじゃないか!

とりあえず手を離してもらえたので、聞いてみる。

「夕鶴嬢はどこかな？」

「アレ、わからない？」

• (後書き)

やっと王道のイベントがイベントが……！  
とりあえず勢いにのつて進んだんでストックもありますし。  
調子に乗つてもう一回更新しようかなと思つたが、それで前痛い思  
いしたんで止めておいつ……  
そしてリオは動かしやすい！いいよねキャラ、いいよね腹黒……！  
と思つのは俺だけ……うん、同類愛です。

いやもう嫌な予感ならひしひと感じてはいるがね。

「ほ・く」

「一寧にも区切る必要のない短い一人称を区切つてゆっくり言い聞かせるよつに言つてくださいましたよ、それはもうムカツクほどに！」

しかもハートマークが語尾につきそつだよ？ 気持ち悪いな。この美形相手に本気でそう思つてしまつ自分は大丈夫だらうが、どひしょ。

現実逃避はここまでにしようか！ 現実を見てみよ、ワタシの格好はこのあらゆる意味で危険人物の前でしていこよくな格好ではない。

うん、タオル一枚は自分でもどうかと思うよ！

「夕鶴嬢に化けていたのだね、うんわかつたよ。だからさつむと出て行つてくれないかな！？」

「ヤダ。」

『ヤダ』ってなんだ『ヤダ』って！ 可愛く言つても無駄だからなー！

そしてなによりこの状況は非常に危ない、経験上。

経験といつても数度しかないが、そのたつた何回かでここまで危機感を感じられるつてある意味凄いと思つよ。うん、キミつて凄いよさすが魔王。

そこ感心している場合じやないね！

先ほど肩に手が置かれていたが、今ちやつかりワタシは抱き込ま

れている。

魔王の格好はいつもの白いワイシャツに黒いズボンじゃなくて、薄くて限りなく白に近い淡い紺色の着流しのようなものを着ている。背中にもろ肌の感触が伝わって、何か恥ずかしいのだけど！？

そんな無言のワタシを見て魔王はクスリと小さく笑った。

「顔、真っ赤・・・まだナニもしてないのに、ね？」

ツ・・・と首の線をなぞりながら、無駄に甘ったるい声を耳元で囁くな！ベタベタ触るな心臓が持たないだろう！！

しかもまだつてなんだまだつて！！ナニかする気なのかい！？

「魔王つとりあえず、んつ・・・！」

しまつた、振り返らなければよかつたのに。なんて後悔先に立たずだけど。

振り返つたら口付けられて、気がつけば後頭部には手が回されていて避けようがなかつた。

無遠慮に侵入してきた舌から逃げるもすぐ絡められて、無駄な抵抗。

もともとこの魔王に逆らおうとする」と自体が無駄な抵抗なのだろつけれど。

長い長いキス、甘く溶けてしまってそつたソレに頭が鈍くなる。ようやく離れたとき、抵抗の一つか二つもしなかったワタシは頭がおかしかつたに違いない。

魔王は何がおかしいのかクスクスと笑っている。

その瞳は妙に熱っぽくて、視線を合わせていられない。

「ダメ。目、逸らさないで？」

クイックと頸を掬われ固定される・・・ビビのタラシだテメエはよ。

「はなせ。」

「これでも結構ガマンしてるんだよ？あ、でもこのままじゃ危ないかもねえ。」

ナニが？

とりあえず聞かないでおいりじやないか、うん。これが一番懸命な判断だと思うよ。

「どうか、そんな田でみられる勘違いしそうで嫌だ。凄く、嫌だ。

そもそも勘違いしそうだと考へてゐる時点でもひまつてしまつてゐる。つかまつてしまつてゐる、彼に。

けれどワタシはその事実に気づけるほど敏感ではない。

「キミさ、こういうことは好きな人とやるべきだよ。勘違いされて、本気な人に気づいてもらえないよ？」

説教たれる気なんて更々ないが、一応警笛程度はしておいりや。

「ふうん……？」

「ちよつ・・・魔王、なにつ？」

言つた傍からナニしているのかなキミは……。

魔王の右腕がわきの下からまわされて、左胸を包むように置かれたと思つたらゆつくりと揉みしだきはじめた。

もう片方の腕は腰に巻きついてゐる。

「勘違い、ねえ……」

熱い吐息が首筋にかかる非常にいたたまれない。

つていうかキミワタシの話聞いてないよね！？大声出したいけど出したら魔王いることばれて絶対拘に何かいわれもない疑惑かけられる！！

なんて考へていたら首筋を舐められた。

「ひつ」

ちよつ、急になにすんの変な声が出てしまつたじゃないか！

「可愛いね、シャノン。」

「だからつ・・・」

話を聞いとけ！

「可愛いのはいいけどね、鈍すぎるといつぱはいー加減苛々してくるんだよ。」



・(後書き)

リオ君暴走中。

・  
「…………は？」

言つた言葉の意味を理解するのに反応が遅れてしまった。しかもやつと口から漏れたのは氣の抜けた言葉にもならない音だけ。ちなみにワタシは自分の事を鈍いだなんて思つたりはしていない。

「なにかつ、気付けて、いない、ことでも、あるのかい？」

今揉んではいけないが胸に置かれたままの手を退けようと苦戦しつつ問う。

つーか外れねえし、どうしてびくともしないのかなこの腕！

「あるねえ。この事になると鈍いんだから、シャノン。」

ため息混じりにそう言つ魔王は何故か呆れている。

意味が解からない。

気付けていないのなら考えても無駄なのだが、全く心あたりがないのだ。

「だから、ね？」

「つ……な」

手が退かされたと思つたら、そのままタオルを奪われた。

一瞬氣を抜いてしまつただけにダメージ大きいぞ今！

座つているから下は大丈夫だとして、自分を抱きこむようにして胸を隠す。もう条件反射だね、コレ。

「これくらい過激にしたら氣付くかな？」

ななななな ナ ニ に ！？

え？ ちょっと本気？ コレ本気？ ヤバイ…… 色んな意味でとても

危険だ！ ！

十八年生きてきた中で一番の貞操の危機。そんな事に顔色を変え内心きょどるワタシを見てクスリと小さく笑つて、うなじに口付

ってきた。

そのまま強く吸つて、次に肩、背、首筋と同じ口を繰り返す。ワタシはといえば、あまりにも焦り過ぎてどう声を掛けるべきかもわからなくなつてこる。もう完全にパニック状態に陥つていてと思つ。

見透かされていのよつとでも穢に障るが、今そんなことは頭にない。

「シャノン。」

「な、に・・・」

もう頭ぐぢゃぐぢゃ、恥ずかし〜じで顔を合わせられず前を向いて俯く。

そうしていたら腰に巻きつけられた腕とは反対の手が内腿を滑つていく。

「つ！？」

なんなんだ、なんなんだ！なんなんだコイツは！…ビリビリ！…いつコトを恥ずかしげもなくできるんだよ！…！

羞恥も忘れてその手を掴みながら振り返るが…なんだかイヤな笑顔と細められた瞳と会つた。

マズイ…と思つたときにはもう遅い。

「ふつ・・・」

再び深く口付けられる。

頭がついていかないのは慣れていながらとつだけじゃない。

長く甘いこの行為に酸欠して、激しく認めたくないけれど彼に酔つてしまつたからだ。いやコイツ相手なら誰でも酔うと思うぞ。

上手すぎるのこの際置いておいつ。触れたらまず後悔するヤツタシ。

のぼせたよつたクラクラする頭を軽く振りたいが、いつのまにか後頭部をがつちり固定されているためそれはできない。

「キミ、は・・・」

「んー？ なあに？ シャノン。」

息も荒く口を開くワタシに、甘いたるく問う魔王を一発殴つてやりたい。

それにしても、解らない。どうして魔王がワタシにちょっとかいをかけてくるのかが・・・いやもつちょっかいの粹を超えているのが。

アレか。ワタシが気付けていないナニかが原因か？ 聞いても答えてくれなさそうだな。むしろこの行為に拍車をかけてしまいそうだ。

言いかけてアレだけどもよく考えたら聞いてはいけないことだった。

さて、どう誤魔化そう。

• (後書き)

今日で一週間たつていると今気がついた・・・  
とりあえずもうリオはセクハラどころのハナシじゃないですね！

## つまぐるの悪戯・前（前書き）

14000人超え！来てくれている方々に感謝ですーー！

というわけでまさかの前後編。

お気に召していただけたら光榮ですーー！

「…………」

「…………」

いや、洋室だから魔王城に変わりはないのだらうケドリロタシ  
に宛がわれた部屋ではないのは確かだ。

上半身だけ起すと、自然と自分の手とか口に入るわけだが。  
整いすぎた纖細な指、白くて綺麗な手だが骨張った男の手……  
凄く見覚えがあるのだけれど？

…………え、ナーノ。

どうやらロタシは魔王になつてゐるらしい。まったく状況を理解  
出来ていなければ、状況説明できる方じ。モモノン。（発音よ  
く言つてみた—）

「何コレ……」

声低いな！ ていうか美声、なにこの美声……寝起きの低いテンシ  
ヨンで混乱もあって唸るように呟いたのに何この美声！？

無意識に長めの前髪を搔きあげるが、何このサラサラ感。うわあ  
ムカツクほどサラサラしているし柔らかい。

どういう手入れをしたらこうなる・・・髪質の問題かこのヤロウ。  
などとグダグダくだらない事を考えていたら、ガチャリと入り口  
のドアが開き何者かが入ってきたようだ。

ちなみに考え込んでいたワタシは気づけなかつた。

「うん、とりあえず成功かな。」

聞きた声の方を見ると・・・・・・ワタシがいた。

「・・・・・・もしかして、魔王かな？」

「もしかしなくても僕だよ、他に誰かいるの？」

うん、そうだよね。というか、ワタシが僕っこになつていいよ。  
目の前に自分がいるつて凄い違和感あるね、ドッペルゲンガーを  
見た人つてこんな心境なのだろうか。

「とりあえず、状況説明をくれると嬉しいな。」

つーか話せ、絶対原因キミだろ。

「状況つていつもね、見たまんまだよ。ちょっと面白そうな術  
みつけたから試してみたらこうなつたでだけ。」

『だけ』じゃねえだろうが!!

コレ結構重要なことじゃないのかな!? 仕事とかどうするの!?

!? 眼鏡くんまた困るよ?!

「それより、さあ・・・?」

この緊急事態を『それより』で片付けやがりますか!のヤロウ!—  
て、ナニナニナニ!— なんなの!? どうして抱きついてくる  
のキミ!—

「いらっしゃいたら、シャノンが僕に迫つてゐるよつて見えるよね

?」

なんてコトをさせよつとしているのかなキミは!—.



つまぐるの悪戯・前（後書き）

短くてすみません！ できれば後編一週間以内にしたいのですが……  
がんばります。

長くなつたら中もはさむかも……

あたふたしていたらガチャリとドアが開いた・・・・あ、眼鏡君だ。

「なつー、ナーナをしている貴様ーー！」

「ウルサイよ、スイレアナ。」

「ーーー？」

顔を赤くして怒鳴る眼鏡君を一瞥して何やら呟いたと思つたら、ドアが勢いよく閉まつて彼は締め出された。

あ、ワタシってあんなに冷たい視線だせるのかー・・・じゃない！

「魔王？彼なにやら激しくあり得ない誤解をしたまま出て行つた気がするのだけど？！」

そしてワタシはそんなに妖しい笑みは浮かべないからねー！？  
第一ワタシが魔王に迫るなんてこの世の終わりでもない・・・あ、やっと離れてくれた。

「つてオイなしてくれてんだテメエーー！」

突然のコトに口調が崩れたじやないか！　イヤそれよりも、なに脱ぎ始めているのかなーーー？

手を掴んで止めるが、もうシャツの方は前が全開だ。  
けれど、ヤツはなんともやな笑顔を浮かべやがつた（ワタシの顔）  
。あえて効果音を付けるなり『ニイイ・・・』みたいな。

「は？え・・・ナーナー？」

気がつけばベッドに押し倒されている状態。

つまり『ワタシ』が『魔王』を押し倒している状態。

ありえない。

クスクスと笑いながら首の線をなぞる『ワタシ』の指。きっと今ワタシ（魔王の顔で）は情けない表情をしているだろ？ 見たかった、すぐ見てみたい。

「ナーチェてるの？ リオ。」

そう言つと、口付けてきた・・・・ヤメロー！

ナニ？ どこから出しているのその声！ それとワタシは自分からキスは絶対なにがあつてもしない！！

「いいね、この体勢。」

・・・・・・・・・・ん？

「ねえ？ シャノン・・・・

体に力が入らなくなりそうな程甘くて低い美声。

目を開ければ、下にいるのは魔王・・・・あ、もどつてる？！ さつさと退こうとしたが、そのままの体勢で抱き締められた。

「！？ ・・・ 魔王、重いだろうから退かせようか。」

気にするのはそこなのが自分！

上に乗った状態で抱き締められているし、イロイロきつい。

「ん？ 重くはないよ？ それに、柔らかいよねえ。」

『どうじょううか？』 低く掠れた声で囁かれる。

「つ・・・・の確信犯め。」



後編！（後書き）

終一アーッ！

ちなみにじつオはいのあとシャノンに吹っ飛ばされてしまひどいにも  
出来ずつい。

残念また今度！？（・・・・）

そしてとりあえず次話投稿も遅れちゃうです。

そして感想増えてた・・・感動しました！有難いござりますーーー（

// //）

「いい歳して痴漢行為か、リオ。」

「雪燈！？」

天の助け！！今心の底から感謝したよ雪燈！そして魔王の舌打ちなんて聞こえないよ？！！

「キミこそなんなの、雪燈？若者一人の戯れぐら見逃してくれてもいいんじゃない？」

「戯れで犯罪に走られても困る。」

眉を寄せため息をつく雪燈。

何でキミ魔王がいたのに驚きもしないのかな？

「しかもいい歳つてなんなのさ。君の方だろ？僕より五つも年上のくせに。」

「ウソ！？」

見えないよ！？

せめて二十歳くらいかと思つていたのだけど、もう二十七！？

「本当だ。幾つだと想つていたんだお前は。」

「もう少し若いかな、と・・・」

重々しくため息をつく雪燈。

あ。若く見られるのは嫌でしたかそうですか・・・

こちらに歩み寄ってきたと思ったたら、羽織っていた紺の着物を掛けてくれた。

そしてついでに魔王と引き離してくれた。（あ、ヤバイ惚れそう・

・  
・  
・

魔王が物凄く不服そうな表情をしている気がするが見てないよ！  
大丈夫、きっと気のせい。

無理矢理自分を納得させてきちんと魔王と口を合わせる。  
なんかため息吐かれたのだけど何故！？

「しょうがないけど、今日はこれくらいにしといてあげるよ。シ  
ヤノン。」

そんな物凄く残念そうに言わないで欲しい。

• (後書き)

次は・・・やっぱ次も遅れるかもしません。orz

とりあえず未遂。

よかつたねシャノン！！

俺的には残念。大丈夫、18禁にはならないから！（たぶん）

キマグレ？！

「まだここにいるつもりなのかい？」

「あら、なごのこどこよ。」

ワタシの目の前にいるのは魔王もとこ夕鶴嬢。

キヨトンと目を丸くし首を傾げる・・・その仕草は破壊的に可愛らしいのだが、中身はある変態だ。

でも、でも！ 本当に中身を忘れて普通に外見だけ見たら癒される。

「・・・・・」

「・・・・・ そんなに警戒しなくてもいいじゃない。」

なんか笑顔の種類変わった！ ついでにその姿でその声は止めてほしい・・・

てか、警戒されているのにどこか嬉しそうなのは何故。

「ん？ 君、警戒心なかつたからねえ。僕も意識されてなかつたみたいだし・・・ さつきのが相当効いたのかな？」

「な、何を言つているのかな？ とりあえず次やつたら吹っ飛ばすよ。」

思い出せないでほしい。そして今更ながら気がついたよ。

ワタシ魔法使えるじゃん！ ！

やあ・・・先ほどはパニックに陥っていたから忘れていたよ。  
・・・・情けないねホント。

「そう。大丈夫だよ、次はちゃんと抵抗できないようにじとくか  
ら・・・ね？」

なななな何この人！！ 全然大丈夫じゃないのだけど！？  
しかも『ね？』で何だ『ね？』って！！  
ちよつ、コイツと一人きりの空間とか本氣でイヤだ。

「それでは、お腹も空いたでしょうし朝食をお運びしますね。」  
二ヶコリ。どうやつたらこいつも違う種類の笑顔を使い分けられる  
のか心底不思議に思った。

# キマグレ？！（後書き）

やつと書けた？

テスト終わつたああああああああ！！

でもテスト返ってきていいです。見たくない！

・

「・・・・。」

手に取つたお茶を口元まで持つてこき、そしてまた戻した。

「魔王・・・?」

「はい、なんでしょう?」

あくまでシラをきるひじい、魔王とあえて呼んだにもかかわらず  
夕鶴嬢の口調で返してきた。  
まあいい。

スッとお茶を指差し笑顔で問い合わせる。

「コレは、何かな?」

「媚薬入りのお茶ですね。」

もうイヤだ!!

「毒を盛るのは止めないか?」

もちろん先ほどの毒入り茶は下げるもつた。

「毒じゃないよ？媚薬とかソコラくん。」

「それは毒だ。」

爽やかな笑顔でナーニ言つちゃつてんのキ!!。  
駄目だ、この人（人間じゃないけどもー）全然反省していないね。  
・・といか反省したことあるのか?  
全然想像できないよ、というか気持ち悪・・・くないよー（すぐ黒い笑顔を向けられた）

「ところで、次はいつ誰が戦うのかな？」

この話を終えないとおかしな方向にいきそつなのでとりあえず気  
になることを聞いてみた。

唐突なワタシの質問にも動じることなく当然の『』とく対応できる  
あたりが若干イラッとするね！

「次は明日だねえ、使うのはリショラかな。そちらが誰を使うの  
かは知らないけどね？」

「・・・彼は強いのかな？」

「僕よりは弱いね。」

・・・・・・・・ そうだろううね。

・（後書き）

スミマセン一日遅れの更新。  
大丈夫です、確信犯ではなく素で忘れていただけになお質が悪いですから！

そして次話ではリシェラが戦います！！（多分！）  
久々の登場なので頑張ってほしいですね・・・？！はコレで終わり  
です。

## キマグレ？！

「シャノン、久しぶりですね。」

にこやかな笑顔のリシェラ嬢。

いつもみたいに女装はせずに前に別れた時と同じ格好だ。

「……………そうだ、ね。」

田が合ひついなや、サッと田を逸らした。

いやマジで謝るからその絶対零度の笑顔を向けるのは止めていた  
だきたい。本気と書いてマジと読むのだよりシェラ嬢知っていたか  
な？

「勝手に出て行ったことは悪いと思っている（ぶつちやけ思つち  
やいない）のだよ？」

「そうですか？」

ヒイツー、怖つーー美人さんの笑顔を怖いと思つのがコチラの世  
界で一田一回はあると思うよ！

そして何故誰も止めに入つてくれないのかな！？

今日は本当は本人達しか来ないようだけど、ワタシは別だ。  
というわけで今ここにいるのはワタシとアヤネ・リシェラと・・・

「もつつ、何なの？ リシェラだけズルイつ！」

伽羅だ。

「」の際ナニがズルイのかは置いておこう、それより助けるよ。

「伽羅、相変わらず気持ちの悪い喋り方ですね。僕と違つて女装はキツイでしょう？ 可哀想すぎて涙が出てきます。」

そう言いつつもその表情は笑顔だ。目が笑っていないけど、めつた悪い顔だけど… それでも美形は得だ、正直カッコイイ。というか、アレ？？？ リシェラ嬢って、厭味とか言う人だったつけ？

「シャ・ノ・ン・ちやあん！」

「わっ」

「離れてくれませんか？ シャノンが枯れます。」

「どうこう意味なのかな！？」

枯れるの！？

そして伽羅嬢抱きつかないで頂きたい、重いです。

それとね、アヤメ君？ キミ、笑い堪えているのバレバレだからね？

キマグレ？！（後書き）

久しぶりのリショラ。

うん、次こそは戦闘？

あと伽羅は名前一回、しかも拘によばれたくらいですね・・・

「それじゃ、始めてもいい？」

あれから言い合いをはじめた二人をなんとか宥め、アヤメにも早く始めるよう急かし、やつとゲームを始めようとしているところだ。今回は浅い水溜り・・・もとい泉のような場所の上で戦うらしい。水は二人の足首辺りまでしかないが広さが半端ない。

森と空が移りこんで非常に綺麗だ。

「いいですよ？僕は。」

「私もオッケーよ！」

二人ともそれぞれの武器を持つている。

リシェラ嬢は両手にナイフ、伽羅嬢は片手に・・・・大きな刀。

あんな得物振り回しているから女装が似合わないのだね、わかつたよ。

まあ服のチョイスが悪いのもあるけれどね！

前回のようすに周りに結界が張られ、二人は動いた。

・・・・・スマッシュ速くてよく見えないよ？

「一人とも暗殺とかそういうの専門だからね。」

「『一ノ一』と無駄に無邪氣な笑顔のアヤナ……暗殺とかそういうのですか……。

伽羅嬢はあんなテカイ刀で暗殺とかできるのだらうかとか疑問に思つたよ。

とりあえず田で追うのも辛い。

観ることを若干諦めかけていた時、一際大きな金属音が響いた。

「ねえ？そのムカツク髪色なんとかしなさいよ、田障りだわ。」

「え？奇遇ですね、あなたもその鬱陶しいヅラ外したらどうですか？ついでに化粧も落としましょ。」

ギリギリと互いの武器を交じあわせて刺々しく言ひ合ひ、「人……

・息一つ乱れていないとはどういうことだ。」

素早く距離をとり、リショウは煩わしいのかその桃色の長い髪を後方に払つた。

「仕方ないですねえ……」

「いっちの台詞よ。」

• (後書き)

戦闘描写は・・・次・・・?

とりあえず色々と忙しいので早めに更新しちゃいます!

明日更新できなさそうなので・・・

スッと二人が手を動かした。

するとリシェラ嬢は髪が銀色になつてよく見たら田の色も濃くなつていた。

伽羅嬢は・・・・・・・・・誰だあの王子様フェイス！

「ビーおー？ 嘎音ちゃん！ カツコイイー？」

「無駄な発言はしなくてよろしいですよ、シャノン様。」

キミはキミでなんか印象変わるよね。  
伽羅はある手に持つているのがカツラだらうね、白いし。  
本当の髪色は明るい紺色で先の方にいくにつれ淡い色合いになつ  
ていて短髪。瞳の色は変わらないらしいが、化粧一つでこうも顔の  
印象つて変わるものだつたつけ？ まいいや、深く考えるのはよ  
そう。

「それよりも、さつさと終わらせましょう？ 伽羅様。」

「そうねえ？ あたしも早く帰りたいし〜。」

再び刀を構え、目つきを鋭いものへと変えた。

片方の口角を吊り上げ不敵に笑う伽羅、嬢・・・・・え？ 幻覚？

「すぐにバラして終わらせてやるよ。」

じゃなかつた！！



（後書き）・

伽羅は真つ黒黒すけ。

そして更新遅れてスミマセン…！

とうあえずさ、王子様フェイスでその黒すぎる発言はよそつか。

「跡形もなく消し去つてさしあげますよ。」

トリシェラ嬢の発言のち大量に放たれる銀色の刃・・・・を軽く避けたりいなす伽羅。

伽羅嬢は、人間だったよね・・・・？  
さすが異世界なんでもアリだね、伽羅嬢の動きはもはや人間業じやないよ。

次々と放たれる刃の合間に息も切らさずすり抜けて、リシェラ嬢の目前へ・・・

『ニイ・・・』と笑うさまはまさに悪役だ。  
刀を振り下ろすがリシェラは後方に飛びのき回避。双方の力は五分五分といつたところだろうね。

「・・・・ねえ？アヤメ。」

「なあに？」

「まだ終わらないのかな？」

「まだ決着ついてないでしょ？」

「そうだね・・・」

なんか、決着とかつかなさそうなのだけど・・・

とか思つていたら泉の水がビキビキと音を立てて凍りはじめた。

リシェラ嬢笑顔が黒いよ？

「イキなさい？ 大丈夫です安心してください、特別に苦しませでさしあげますから・・・」

大丈夫要素どこー？ うわあ 悪趣味さすが兄弟だね！！

凍つた水が竜の形になりおおきな口、しかも牙は鮫のように鋭くズラリと並ぶそれを開け伽羅嬢にすごい勢いで迫る。

伽羅は避けるが竜は何の抵抗もなく氷の泉に吸い込まれていく、どうやら竜にとつて氷は水と同じようなモノらしいね。竜の猛攻はとまらず伽羅嬢を襲う。

「足元にも注意くださいね？」

「つな・・・クソッ！」

につこりと素晴らしい笑顔とともに忠告したと同時に、伽羅嬢の真下から現れた竜の巨大な口・・・逃げ場は、ない。バクン と閉じられる口。

けれど次の瞬間飛び散ったのは氷の竜。

「え・・・？」

首筋に突きつけられたのは巨大な刀、噛っているのは伽羅嬢。ええと、とりあえず説明・・・多分、本当に全然見えなかつたけど！ 噛み碎かれる前に内側から伽羅嬢が刀を振るつて逆に竜を碎いた後、物凄い速さでリシェラ嬢の後ろに回つて刀を突きつけた（

と思つ) のだわつ。

これ・・・止めないと伽羅嬢本氣で殺る気だよね。

「ハーサイ、そこまでだよーー一応殺しあはしあダメになつてゐからね

」

アヤメのビームでも明るい声音が伽羅嬢を止めてくれた。

• (後書き)

遅れていますんでした！ついでに戦闘シーンしようとぼくてすみません！！

でも終わつたああああ！…やつと終わりましたよ？…

次は多分メガネ君ですね、番外でポロッと本名でしたが…。

## キマグレ21！

あれから城に戻つて何故か伽羅嬢とお茶している・・・  
アレ？本当になんでかな？

「チツ・・・むかつくなあ。」

「ナニがだい？」

「ちよつ、なにこの口怖い・・・！」

ワタシこれでも一般人だから、そんなオープンで黒くなられても心  
臓もたないから！

という心中での葛藤は聞こえなかつたらしく（という事は腹黒属性ではないらしく）、一瞬キヨトンとしてこちらを見た。

え、ナニ？

「気づかなかつたの？あのムカツク髪色したヤロウが手え抜いてた  
の。」

ヤ、そんな高度な観察眼望まれても。

そしてしばらぐの沈黙・・・伽羅嬢、そんなにジッと見つめられても何も出ないよ？といつかやめてほしいな穴が開きそうなのだけど。

「うん、まあ・・・不思議だよね、アンタ。」

「ナニが不思議なのか突然すぎて検討もつかないね。」

本当に突然どうしたのキ!!。

「腹筋ひきつけ嫌な予感してた……まあその企み顔をやめよつか。」

「腹筋ひきつけ、腹筋に勝つたんだろ？ 強いはずなのに隠だりけ。」

「…………否定は、できないね。」

アレ？ 何か似たようなことを魔王にも言われたような……？

「オレが背後にいたって抱きつしまで気づかなかつたし……」

普通物音立てずに背後にはいられたら気づかないものじゃないのかな？

「…………とか何なんだい？ ナニが言いたいのキイ。」

「まあ可愛じだからいいけど。」

「ぐつ……」

変に渴いた喉を潤そうとお茶飲んでる最中だつた……ナニ急言こ出しつんの吹いちゃいそうになつたじやないか……

「…………まあ、なんとか頑張つて止めたけどもさ。」

「話が飛ばなかつたかい？」

「そ？ てか、照れつんの？ かーわい」

「どこのキャラ男みたいだね。」

なにかばぐりかされた感は否めなかつたのだけど、結論いろいろお茶会はお開きになつた。

## キマグレ21ー（後書き）

はい連載再開！

・・・イエ別に停止していたわけではないんですけど。

そして久しぶりに書いてみてサブタイトル書いていた時に重要なことに気がついてしまいました・・・！

数字の?というこれ、?までしかでない。○r z

まあ仕方が無いのであきらめましたがね！！

とりあえず遅くなりましたがこれからもキマグレセカイを見捨てず  
お願いします！！

「あまり他のヤツらと話さないでね？」

「……突然だね。」

「いつものようにそりげなく人の部屋に不法侵入している魔王。うん。本当当たり前のようにいるよねキ!!。」

セキュリティ・・・見張りとかだいじょうぶかい？ 王城なのに。とこつか何なんだいキ!!。ワタシの彼氏かなにかじゃないのだから・。

「恋人じゃなくても嫉妬ぐらうするもんじゃない？」

「口に出していたのかな？」

「うん、そうだね。」

・・・・・ 気を付けよう。

「どうか、え？ 嫉妬？ なに魔王が？

「吸血鬼でも風邪はひくのかな・・・」

「熱はないし」冗談でもないから安心していいよ、シャノン。」

笑顔に輝きが増したのは何でかな！？それと安心要素で「！-！-？」

今更だけどやつと気がついた・・・魔王怒っているね！

「え、ちょっと何でだい！？」

全くもって心当たりがないのだけど！？

「だつて君、本当に全然気づいてないんだもん。」

「なにに？」

「僕が、君をどう思つてるか・・・とか。」

「は？」

一瞬思考が止まった。

• (後書き)

リア充○○しろ!  
を聞きながらの投稿・・

いい歌だよね、うん。 o'z

そして6歳差つて口リコンかと切実に問いたい!

「……………わからないよ。」

何故か声がうまく出せなかつたけれど、なんとか頑張つて普通に話す。

だいぶ同様してしまつたけれどね、これは本心だよ？

「そう~。」

ああ嫌だね、その笑顔。

笑顔が物語つているよ『本当に?』ついで……背後の黒い靄が気になります。

・・・・・ちょっと、魔王が急に変なこと言い出すから突然シリアスに突入しちやつたじやないか！

あ、フザケテすみませんでした!!

「余裕だね。シャノン？」

「フツ余裕なんて欠片もないよ。」

そのせいでキャラまでもが若干かわっちゃつてているしね！

真面目に考えるからその黒いモノをしまつてほしいな……溶ける

「でもね、キミ本当にに考えているのかわからないよ。」

「ふうん……」

そんな心底残念そうな声出さないでよ、地味に凹むから。

ちらりと視線を魔王へやるとバチリと皿が合つた。

「じゃあせ、シャノンは僕のことばいつ弔つてるの？」

「え・・・？」

「うこうときだけ真顔になるのはやめないかい？ 趣味が悪すぎるよ。でも、そうだな・・・ 考えたことなかつた気がするね。

友達？・・・いやいやいや魔王の友人だなんておこがましこよ！」

(・・・・・)

「アレ？」

そういうえば本当になんなのだろうな、微妙だよね。なんか今更だけれど・・・・・

「・・・難しいね。」

「僕のコト好き？嫌い？」

女子学生かい？キミは。

ツツコミが頭をよぎつたが言わなかつた！ わけで空氣読めなくはないよワタシ。

悶々と考えていたらいつの間にかすぐ近くまで来ていた魔王。今すぐくびつくりした。けれど、魔王の表情はよく見えない。

「抱きしめて、キスして、それでも・・・気づいてくれないの？ 好きになってくれないの？」

「え？」

触れるだけのキスをして、ぱちぱかと髪をしてくる間に忽然と姿を消してしまっていた。  
けれど最後に見えた彼の表情がどこか切なげなのは氣のせいであつてほしいと無性にそう思った。

• (後書き)

リオが可哀想になつてきた今田この頃・・・。  
進展しそうだけども！ これでも本気でリオの思いに気がつかない  
シャノンはどうなんだろう（ 　　： ）

鈍感ではないはず・・・なんですかごねーーー！

## キマグレ22!

「好きだよ、シャノン。」

聞こえないとわかつていて咳くナビ、ナツヒツ虚しいよねえ・・・  
好きな口に好きだつて氣づかれないヤローほど悲しいヤツつてない  
と思つんだよね、僕。

・・・まあ、その可哀想なヤローが僕なんだけどね。  
あーあ、損だよねホント。

「性格のせいじゃない?」

(・・・・・)

「つはー・・・・・

「な、なにそのいかにも会いたくなかったつていう反応・・・・・

うつわー・・・嫌なヤツがきた。

突然何の前触れもなく現れた銀髪キツネ目を見掛だけは青年くらい  
のヤツを睨み付ける。  
どうしていんの? むしろなんで生きてんの? 早く連れてほしい  
んだけど。

「うう・・・心の声と冷たい視線が痛い・・・

「仕方ないよ、兄さんアンタのこと大嫌いだからね。」

「リシュラ・・・なんで口イツ僕の部屋にいたの?」

「元魔王を力ずくで帰らせると、無理だよ、僕じゃな。」

まあ、うだよねえ……いぐら純血でも、魔王との違いは歴然だし。

ていうかウザ。—————ナーナーの田開かないの？  
キツネ田やめるよ。

「お父さん嬉しいな やつと二人にも想う相手ができる……可愛らしい異界のお嬢さんだったね。」

お父さんとか・・・ウッゼー。

その心底安心したとかいう表情イラつく マジで。うん、すぐ殺したい。

袖の無駄に長い、隠れた手で口元を隠してクスクス笑うセイン（クソオヤジ）。

「セイン様、何の」用件で戻られたのです？ そろそろ兄さんの魔力にあてられて倒れます。僕が。」

「ん？ あー、ゴメンネ。ちょっとした忠告だよ、キミたちにね。」

## キマグレ22ー（後書き）

まさかの父親登場。

リオは父親のことになるとすみます。

もうそろそろ物語を進展させたい・・・あと、拍手をやめさせて設置

できました！

拍手お礼文、月ごとに変えます。

今月はハロウインネタ！

薄く田を開くクソオヤジ。田の色は僕と違つて鮮やかな牡丹色。リショーラは田をそらす。あまり魔力の強くないリショーラだから、田が合つたらいけない。

強い力にはダレもが魅入られるモノだから。

「なに？ 忠告つて。」

ヤな予感しかしないんだけど。

そう聞くと、クスリと笑うセイン・・・ああ嫌だなこいつの。似てるつて自覚あるからなおさら嫌なんだよね。

「彼女の『ト』は、諦めなさい。」

「イヤに決まってるでしょ？」

「馬鹿じゃないですか？」

「だらうね。」

ゆつくりとさとすようにいつた言葉に間をおかず答えた。予想くらいいついてたんだろ？ ね、表情変わつてないし。気に食わなくて睨みつけていたら元の表情に戻るクソオヤジ。

「んー・・・まあいいや、けど忘れないでね？ 彼女はいつか帰らなきやいけないんだよ。」

言い捨てて漆黒の翼を広げた。飛び去りゆくその姿はまさしく魔王。

とこゝか、わかつてゐ事を言われるほど腹が立つ事はないよな。僕だつてわかつてゐんだよ・・・

シャノンがいつか帰らなきやいけないことくらいね。

• (後書き)

終わりが・・・見えない。

展開的には終盤っぽい・・・が！

なんか最近おちが見えないんです。そしてガンバレ  
リオ。

アリストパロ？！（前書き）

ユニーク数28,375人！

読んでくださっている方々に感謝！！

というわけで番外。

## アリスパロ？！

アリスといえば、青いワンピースに白いフリルのかわいいエプロンの女の子。

・・・・・・闇色のローブをまとった怪しいことこの上ないアリスなどいらないだろうと我が事ながらに思つ。

「アリス！」

「わあっ！」

白いウサギ耳が無駄に似合ひ長身の美女もとい美男が背後からもの凄い勢いで抱きついてきた。

追いかけるのはワタシ（アリス）の役目であつてキミ（白ウサギ）の役目じゃないんじやないかな？

それが自らの口に出でてきびつするんだ、きちんと役目は果たしますよう。

そんな注意なんてするひまなどなく、突然視界が反転したと思つたら担がれていた。

「今度はなんだ！」

「え？ 女王様に会いに行かないよ、ね？」

「誰だよ女王！」

「え？ なに？ ハートの女王？ 誰？ つーかまさか早速処刑！？」

イヤすぎる

「フフツ、命が惜しいから全力で抵抗しようかな。」

そうワタシが冷や汗を流しながら言ひが、白ウサギはニンマリと  
笑い衝撃の一言。

とにかくその表情からして嫌な予感しかしないよ？

「大丈夫よ～？命は安全だから」

命は？“は”つてナニ！？そこ強調するの！？  
なんだか叫びもむなしく城に連行されていきました（泣）

アリストパロ?!（後書き）

短い・・・

そしてどうしようか思いつかない・・・（ 0 0 : ）

それと今用の拍手文番外じゃなくて連載しようか迷つてる小説の短  
編的な・・・

ダイジョウブ。スランプなんてすぐ抜けるさ（ 、 、 ； ）

・・・・スマセソ！～○～

アリスパロ？！

「ようこそハートのお城へ」「

「なに？キミら仲っこいの？え？」

結構険悪だつたよね？

白いウサギから三日月ウサギに引き渡された。

「女王様つてダレなのかな？」

「それは会つてからのお楽しみだよ。」「

大体予想はつくけどね・・・。

それより腹が圧迫されて吐きそう・・・ウツ・・・

「吐いたりしたら落とすからね？」「

「軽い冗談じゃないか。ははっ・・・」

「ゴメン、わりと本気だつたよ。

ていうか密なんだからもう少し丁寧に扱つたらどうだ？！

「ついたよ、はい。に・・・女王さまー？アリス様がお着きになりましたよー？」

「コンコンと扉を軽くノックして少し大きめの声で中へと呼びかける三日月ウサギ。

あれだよね『兄さん』て思いつきり言いかけたよね。

「まあっ！本当に？」

夕鶴嬢の声だよ。魔王の声で今の台詞はキツすぎる。  
ガチャリとドアを開けて出てきたのはドレスすがたの夕鶴嬢・・・  
美女は何着ても似合つね、ついやましい限りだよ。

あと笑顔が眩しいです！

・・・・あつでも本性魔王だつた。

「どうぞどうぞ、部屋にお入りになつて？」

魔王よくそんなしゃべり方できるね。なに、趣味？ははつまさか  
ね！！

「兄さん、まだ仕事の途中でしょ？それと抜け駆けだなんてよくない  
と思つなあ。」

リショーラ嬢怖いよ黒いよ笑顔が！！

うわあ嫌だこの兄弟間にいたくないよー？  
思わずといづかわざととこうか後ずさつていたらガシリと両腕を掴  
まれた。

一人を見るどりうな笑顔。うわあ嫌だ。（一度目）

「「どうに行くの？」

さすが顔はあまりにていなくても双子。息ぴたりだね  
しかもなにキミいつのまに夕鶴嬢から魔王にかわっちゃつてんの・・・  
・とか冷静にしている場合じやなよワタシ！

え、あ、どうじよつ逃げ場なし…?

「じゃあちよつとお茶でもしようつか。」

「寝室でもこいナビね。」

「僕は3マでもこいみ。兄さん?..」

「却下。」

「残念。じゃあ気が向いたらこいつてね?..

・・・意味はわからないけどとても悪い予感がしました。  
あれ、コレアリストパロじやなかつたつけ?

アリストロ?!（後書き）

月またいじやつたよ、すみません！  
次回から本編です！

## キマグレ23!

「シャノンはや、むじひに帰りたいの？」

「え？ このゲームが終わったら帰れるのだよね？」

いつものように夕鶴嬢から魔王に姿を戻して部屋に居座る魔王の  
問い合わせに即答したら何故か機嫌が悪くなつたようだつた。

・・・・・あれ？ なんでそこで機嫌悪くなるの？ 意味わからない  
のだけれど

ダーンッ！

ビクリと体が大きくなつた。ちなみに今の大音は魔王が壁に拳  
を叩きつけた音だよ。

しかもワタシの顔のすぐ横。

「つ・・・！？」

「ねえ シャノンはさ・・・」

え？ ワタシ何か失言した！？ なんでそんな怒つてんの！？  
今までにもなんか魔王の機嫌を損ねたことは幾度かあつたけれど原  
因がわかつた試しはない気がする。いや確實にない！

つまるところ考へてもわからない！！（開き直り。）

「僕と会えなくなる」ととか、考へないの？」

「え・・・・・」

あ、  
そ  
う  
か。

県とか国とかそういうレベルじゃなくて、世界を超えるのだからそういう簡単には合えない・・・・というか、帰つたらもう一度と会えな  
いかもしないわけで。

(それは・・・)

「悲しく、ないの？」

「それは・・・・・つ・・・・」

わからぬ!

というよりこの前からワタシなんかオカシイよ？え、なんで。

「好きだよ。」

「・・・・・え」

突然すごいことで疑問形にすらならなかつた。  
てか、え、聞き間違い？

「好きだって、言つたんだよ。」

飲み込めていないワタシに苦笑しながらもう一度言つ魔王。

その表情かっこいいね。・・・・じゃなくて。  
どうしよう、あまりに突然のことで現実逃避に走り始めたやつ

たよ。

ああもう本当、ワケがわからない。

## キマグレ23ー（後書き）

なにこの急展開！！

久しぶりに書いたら展開はせつ！

そして最近違う連載ばりばり書いていたりキマグレのテンションで  
ついていけなくなっちゃった(@@;)…

・・・・なんで誕生日に必死こいて進めたんだろう自分(遠い田)

・

「好きひで言われても・・・」

「あれだけ積極的な態度をとられて気付かない方が不思議だな。」

「うわー。」

「盗み聞きなんて、野暮だなあ。」

「気付いていながら告白する彼方も相当性質が悪いですよ。」

「何故拘と雪瞳がいるんだい？」

「え、ナニ今流れ全部聞いていたのかな！？」

「あーあ、本当邪魔だよ。特にそこの妖怪とか妖怪とか・・・」

つまり妖怪が邪魔だつたんだね、わかつたよ。

「・・・・・・・・・・・・え！？」

「長い沈黙だつたね。いるじゃないそこに鬼が。」

「私のことですね。」

なんか納得しちゃつていい自分はどうなんだう、なんて。

“鬼”ね・・・妖怪までいるなんてなんでもありだな流石異世界。

「ああもひか達がきたせいでシャノン別のことに意識がいつちやつてるよ。どうしてくれんの？」

苛々としている様子の魔王はクシャリと自分の髪を掴んで一人を見みつけた。

うわっ、猛禽類みたいな目だから余計に迫力ある。

忘れてはいのだけどね、さつき。

それを事実として受け入れていないワタシは酷いかな？

まあ魔王が本気ならそれってすごく酷いことだとは思うけれどね。

とりあえずあちらの方で静かに嫌味を言いつている魔王に目線だけを向けると、案の定バチリと目が合ってしまった。

「シャノン。今すぐ『じやなくていいから、答えをきかせてね？』

まだなにか言いたそうな拘たちを置いて、こつものよつにフツ  
ときえた。

・・・・」の空氣をぎりしてくるのかな、魔王。

・（後書き）

なかなか主人公が酷い。

いやー難しいねー、テンションについていけないって言つかもはや展開にすらついていけない作者ですよ（殴

どうしようこれもう数話で最終回な勢いだよコレどうしよう…でも次の更新は年明けですかね、すみません。

新年早々最終回迎えそうです。

でもークリスマスには番外投稿しますー！

本当ぐだぐだですみません！

読んでくれている方々ありがとうございますー！

「イヴ！」

「イヴだね。」

「イヴだな。」

「そうですね。」

「わつともつあがりつよ  
　　」

「黙れクソオヤジ。」

「わあヒビキね  
　　」

「やの ウザイ。年甲斐もなくやめてくれない？」

「・・・・いろんな子に育てた覚えないんだけどねえ。」

「リオには甘いですよね。あなたは。」

「ゴッキー君だけだよやつらつてくれるのはー。」

「..... セウですか。」

「雪解けでいるよ。」

「これ、イヴの番外なのだよね？」

「明日はちゃんとクリスマスの番外するからこよ。」

「・・・・ふうん。（ワタシ発言しない・・・）」

「なにがある？」

「何にもないですよ？」

「ないな。」

「えー？」

「黙れ。」

「終わるか。」

「……そうだね。」

「じゃあ帰るね」

「一度と来なくていいよ。」

「・・・・酷いねえ。」

イヴ！（後書き）

お父ちゃん再登場！

オチなしイミなしイヴ番外。  
明日はちゃんとします。

## クリスマスー（前書き）

本編無視。

父再登場でもうすでに知り合つてゐる」と云つたがつてしまふが・・・  
きにしないでください。

本編とは関係あつません！

## クリスマスー！

「やあ、異界のお嬢さん。」

「…………」んにちはセイントさん。」

「やだなあお父さんって呼んでくれていいのこ

「のノリについていけない。

ワタシが悪い？ いや悪くないよね！

「今日は聖なる日だよ？ 知つてた？」

クリスマス？ や、こちらの世界にキリスト教なんてないのだから違うのだろうね。

・・・・・あつたときも思つたのだけどこの人目開いているのかな？聖なる日について何かと語つているのを見ながらなんとなく考えていた。

「とこうわけでこれを君にあげよっー。」

「・・・え？」

『いりません』と反射的に言つてしまつといひだつた。

とこうがどうしようつ・・・全然話を聞いていなかつたのだけど。手渡された小瓶。 中には淡い桃色の透明な液体が入つていて、液体が揺れる度にラメでも入つていてるよつにきらきらする。

・・・・・ 怪しつ！

「あの・・・・・。」

これがなにかと聞こうと視線を上げると、先ほどまでいた人物はいなかつた。

突然現れて突然消えられるとたいへん困るのだけど…。

まあいいや、聞けばわかるだろうと思い立つてとりあえず誰かさがすことにした。

## クリスマスーー

しばりくウロウロと歩きまわっていたらメガネくん・・・スイレアナに出てわした。

「貴様、そのクスリはどうしたんだ・・・?」

「セインさんに押し付けられたのだよ。」「

「ああ、セイン様に・・・」

なんか哀れみの視線にかわった。

え、なんで? ああそうか。みんなあのテンションについていけないのだね・・・

「これは何なのかな?」

「ああソレは・・・絶対男には渡すなよ。とだけ言っておこうか。」

「ふうん・・・?」

無表情だけれどどこか意地の悪い声音で意味のよくわからない返答をくれた。

訝しむワタシを見るスイレアナの瞳には面白がるような光がちらちらと見える。

どうやら、聞く人を間違えたようだ。

「まあ・・・気をつけろよ。」

「やつした方がいいだろ? な。精々がんばれ。」

・・・・何を?

## クリスマスー（後書き）

メガネくん悪い人じゃないんですね。

## クリスマスリー

「シャノン？ デリしたんですか？」

桃色のシアンテールを揺らしながら、近づいてくるのはリシェラ嬢。

聞くべきか聞かないべきか……よく考えてみればこの口が一番よくわからない人だつたりする。

「いや……少し聞きたい」とがあつたのだけビ。

『やつぱりいこよ』と軽いかけたのだが、何故かスッヒ田を細めたリシェラ嬢。

その視線の先はワタシの手に握られた小瓶。

おや？ 嫌な予感が……

「それ……エリヤ手に入れたんですか？」

エリヤ

ヒツ・・・！ エリヤ怖いよキリ…

ワタシが自分で入手したわけじゃないから…

「セインさんに頂いたんだよ。」

一瞬キヨトーンとして目を伏せたリシェラ嬢。

憂いでいるようなその表情はとても綺麗だが小声で呟かれる「」とは

全然綺麗じゃない。

『あのクソ親父が……』とか、『べだらない』としゃがつて・・・

・』とかといいひい聞こえてくる言葉がいつもと違こすぜや。

・・・・・とこつかあの人は子供も一人から嫌われているのか、可哀そづ。

リシュラ嬢は最後に大げさにため息を吐いてワタシを見据えた。

「それ処分したほうがいいですよ。ある意味毒ですので。」

「ある意味つてどりこり」とだい?」

「わあ、凄く嫌な予感がある・・・スイレアナの言つてこたこともあるし。

「まあ・・・所謂媚薬つてこりやつですね。」

そんなモノをワタシに渡してどりある氣だったのだひつ。  
まあ考えたくもないけれどね!

とにかくせつと処分してしまおうと血圧へ戻ることにした。

「ああ、僕にくれるんなら喜んで貰こますナビ?」

「絶対にあげたりしないから安心していいよ。」

可愛らじく首を傾げてもダメだからね!

あとキミ田が本気・・・深く考えるなワタシ。



## クリスマス四一

「シャノン、どうしたの？」

「うわあー！」

盛大に驚いてしまった。  
うわあ恥ずかしい。まだドキドキとなるのを抑えようとしたながら振りかえる。  
いつもどおりの・・・けれどもどこか探るような笑顔をした魔王がいた。

なんともタイミングの悪い。ちゅうりの小瓶を消そうとしたところ登場するとは・・・

「ノックべりいしたらいつののかな？」

「それじゃあつまらないよ。」

なにが！？

突っ込んだらきっと素敵な笑顔でなにか言われそつなのでやめておいた。

「それよりさあ、シャノン？」

「なにかな？」

「それ、ナニ？」

指差したのは例の小瓶……これについて問われたの今回何回目だろ。

ところが魔王、絶対コレが何かわかつて聞いてくるみやね？

「セインさんから頂いたんだよ。」

押し付けられたという方が正しいけども。

『ふうん?』と呟いてジッとそれを見つめる魔王。え、なにひいつたの?

ひょことその小瓶をワタシから取り上げると窓際へ行き、光に翳すようにして用の方へとむけた。

「ああ、やっぱりね……シャノン、おいで?」

そのまま窓を開けてバルコニーへと出た魔王。

手招きをされ後へ続くと淡く微笑まれた……顔に熱が集まっているような気がするのは気のせいだ!

「よく見てね?」

パンシと音がしたと思つたらあたりに散つた液体。それは夜空に散らばりきらきらと淡い色で煌めいていて、とても幻想的で美しい。

「キレイでしょ?」

「…………そう、だね。」

「セインは昔僕らによくじつて見せてたんだよ。」

「うひつ事だけはよく思ひつゝよねえ……なんて呑く魔王。

「聖なる日なんて馬鹿馬鹿しいけどは思ひ出さ、シャノンとなら別にいいかもね。」

なんて、今の風景よりもキレイな笑顔で言われてしまつと……本当にキミは、心臓に悪いね。  
けれどそのキレイな笑顔も一瞬で、次には爽やかな笑顔……あれ、嫌な予感がするぞ？

「それじゃ、ベッドにでもこいつか。」

「今の感動を返してくれ……。」

## クリスマス四一（後書き）

間に合わなかつた！！

最近魔王組が出番少ないのでクリスマス番外は出張つてもらいました！

番外が四！まで続くなんて奇跡・・・！

しかも拍手のお礼文も変えられるなんて・・・！

甘さが足りない氣もいなめませんがもう限界・・・しかたないよ、明日餅つきだもん（関係ない）。代わりに拍主文の方が若干甘いです。

## キマグレ24！

「久しぶりだねえセス。」

「え？ なんでそんなに怒つてんの？」

「え？ むしろなんでキミ相手に怒れないでいられるのかな？」

怒るに決まっているじゃないか。

そうしてなんだい？ ワタシを呼び出すなんて・・・これは厄介事  
決定かな？

「話が早くて助かるな。」

「まだ何も言つてないけど？」

「『ふざけんじやねえよ』みたいな表情だったから察しがついたん  
だろ？』

「こや、あのキミ・・・ワタシの性格を誤認しちゃつていいみたい  
だけどー？」

ヒクリと引きつり若干歪な笑顔を浮かべるワタシ。  
そんな表情滅多にしないからね？

「まあいい。それより・・・」

「ワタシ的には非常によろしくないけども。」

「お前と同じセカイにいた人間が一人“落ちて”きた。」

「そりゃ。」落ちて“きたといつ」とはセスが喚んだワケじゃないんだね？で？地上に直接降りられないキミがワタシを呼び出したというのは・・・ワタシに連れ戻してきてほしいワケだ。」

なんて都合のいい駒なのだろうね、ワタシは。

腕を組み、考えるような素振りをしてセスを軽く睨んだ。

とこりか。じうじうのまゝの世界の地理に詳しい人たちに頼めばいいんじゃないいか？

「気付いてたんだな、俺が下に降りられないこと。」

「夢の中でもとか、声が聞こえたとか・・・そういうのはあるのに地上に降りてきたという記実はなかつたからね。キミは“降りてこない”んじやなくて”降りられない”んじやないかと思つてね。」

「ああー・・・わしこいつアテマ回るよお前。」

「じいじいミミかなそれは？」

またもヒクリと口元が引きつった。

まるでじいじが違うところでは頭が回らないみたいな言い方が腹立つ・・・

「まあいいや。」

「いいのかよ！・・・まあ、切り替えが早くて助かる。」

「どこに落ちたのかな？」

「ちょうどお前が最初にいた森の中心部あたりか。」

「そう、うんまあ・・・わかったよ。」

なにやら呼び戻されるような感覚が急にきた。  
ちよつとびっくりしてやつたじゃないか・・・。

「セス？」

「俺じゃないぞ！？ これは魔王あたりだろ・・・それにしても、  
強引に呼び戻そんなんてやつてくれんなよ。」

深いため息を隠さずもらすセス。

・・・・こや、溜め息つきたいのはこっちなんだが。

「じゃあよろしく頼んだぞ！」

「断つても無理やり押し付けただらぬキミ。」

嫌味な笑顔を貼り付けて軽くてを振った。

次に目を開ければきっとタ鶴さんあたりがいるのだね・・・

## キマグレ24！（後書き）

遅くなつてすみません・・・・・！

受験生・・・とうとう私も受験生・・・更新遅くなると思います。  
さすがに一ヶ月以上はあけませんが。（。・。）

・

「おはよ〜! ジゼーもす、シャノン様。」

「え? なんでキミに膝枕なんてされているのかな?」

起き上がるうとしたら肩を押さえつけられた。

ちよつ、なにキミ起き上がれないんだけど・・・!

「世界神に、何を言われたの?」

世の男性が一発で陥落しそうな微笑をたたえて問い合わせられた。

『キミには関係ないだろう?』 そう言って素晴らしい笑顔を挙むことになるのは田に見えているので、これは大人しく白状しようじやないか。

アレ? なんだら〜の敗北感。

「・・・・と、いつ訳なんだよ。」

「ふうん。そういうえば彼女、君の名前呼びながら爆走してたよ?」

「へえそう。知り合いかな？……とじゅうでキイ。なに。その見てきましたよ発言。」

「来る途中で見かけたんだけど、どうでもいいから素通りしてきた」

・・・・・ 酷くない？

しかも『彼女』と言ったよね？女性なのだよね？女性が一人見知らぬ森の中で一人困ついていたら助けてあげるのが普通だろ？！？

「女性に対する態度やなんやらを一小時間ほど説いてあげたいくらいだけど、

その口を助ける方が先だね。」

なんか呆れられたような視線がきたけれど気にしない。

・・・とにかくキミ、なんとかつか・・・ねえ。なんでそんなに平然としてるの。

うあああいやだ。ワタシが一瞬でもそんなことを気にしてしまっているのが非常にいやだ！

ああ情けない。

・  
「あ、確かにこの辺つだよ。」

「ああ・・・わかった。」

色々と尋ねてこねうち、こつらまにか田畠地に着いたようだ。  
暗い森の中を暫くきょりあよひと辺りを見回していた人、の辺り  
しきものが聞こえてきた。

・・・・なんか近づいてきしない?

「ねえ・・・」

「ん? なに?」

「なんか物凄く聞き覚えのある声・・・おや?」

とりあえず避けた。

「酷いー!」

「飛び掛つてくるキリギリス?」

普通に抱きつかれるのだったから避けないのださび、今の抱きつく  
よつな勢いじゃなかつたら・・・

「えつと、如月さん・・・?」

「せーー!」

ポニーテールを揺らしながら叫んでいる彼女は確かに『如月夕菜』。出会い頭に抱擁つきの挨拶をかわすほど仲がよかつたわけはないんだけどね？

「ところで、大丈夫？ ケガとかしていいかい？」

しゃがみこんでいる彼女に田線を含させて聞いかける。

「そんなところが大好きです先輩……」

どんなところ…？

とつっこむ余裕もないほどの激しい抱きつきようだった。いや、嫌なわけではないのだけどね……とりあえず苦しいので話して欲しいかな！

「愛の告白せよついからとうあえず離れない？」

べりつと彼女が離れたと思つたら、魔王が彼女をはがしたようだつた。

なんだか・・・背景の黒さが二割り増しな気がする。

「彼女？」

「ワタシに女性の恋人がいると言いたいのかなキミは。」

何故か魔王城で、しかも何故か魔王の私室で、どうしてあの場所の落ちてきたのか聞こうとしたら何故かワタシの魅力について熱く語りだした彼女。

そんな彼女を見てぽつりと呟いたのが先ほどの一言だった。

「わたし嘎音センパイが心配だったんですね！」

悲しそうな表情でうつむく姫月さん・・・あれ？

「ワタシは向こうで何日いないことになつていてるのかな？」

「え？わたし嘎音センパイが田の前で消えてすぐに追いかけてきたのでわかりません。」

え、なにそれ。

ということは、向こうでは全くといつていよいほど時間がたつていな  
いということなのかな？・・・わからない。

「ふうん・・・キミ自力で追いかけてきたの？」

「セーンパーイ。誰ですかこのキャラキャラした感じの銀髪野郎。」

うらやましき銀髪野郎つてキイな、そんな言葉使わない方がいいよ。

とこりか今話逸らしたよね。ワザとだよね？

「それで…これからどうするの…君。」

え、なんでそんな冷たい言い方？魔王如月さんに冷たくないかい？  
そんな彼に、意味がわからないとこりふつに顔をしかめる如月さん。

「どうして、センパイと歸るに決まっているじゃないですか。」

魔王の笑顔ついでに空氣まで凍りついたきがした。

・

「あーあ、ねえ本当勘弁してよ。」

魔王が疲れたようにため息をついた・・・

「やだなあ全く。父親の顔見てため息つかないでさ。」

魔王の父親らしい人を目の前にして。

前髪を鬱陶しそうにかきあげながら、その眉間に盛大に皺が寄せられていた。

魔王と同じ銀の髪に、開けているのか開けていないのかわからな  
い狐のような目。

随分と若く見える・・・といふか、若いな。

「ん? どうしたのかな異界のお嬢さん?」

「随分若いですね。」

首を傾げる仕草とか似てる。親子だね。

「わうかい? それはどうもー でもお父さんって呼んでくれちゃつ  
ていいよ」

「・・・ウザッ」

吐き捨てるよつに言つた魔王はたいそつ機嫌がよろしくなによつだ。

腕を組み明後日の方へ顔を向けている。反抗期つてレベルじやないよね！」。

「あそうそう、私はセインといつんだ。セイちゃんつて呼んでくれてかまわないよ。」

「遠慮します……。」

苦手なタイプみたいだつた。

少し引いていたらセインさんがパンツと手を叩いて何がおかしいのかクスクスクと笑つて言つた。

はやくもテンションに置いてけぼりをくらつた。

「ちなみに私は神代理つていうのもしてるんだけどー。今日はキミ達に重大なお知らせがありまーす」

なんかさらつと凄い事言つたけどひつこまなくていいのか……いいか。

というか重大と言いつつ全然重大そうじゃないなと思つていたら、スッと目を開かせたセインさんの鮮やかな牡丹色の瞳を見て思考が一瞬止まつた。

「キミ達には至急帰つてもいいですか？」

爆弾が投下された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0910k/>

---

キマグレセカイ

2011年11月26日22時45分発行